謡曲拾葉抄

大原流華
西行橋
朝顔
千寿
雲林院

七

大原御幸

西海にをいて平家悉くほろび、安徳天皇海に沈ませ給ふ。女院も同じく入水ましましけるを渡辺源五馬允熊手にかけ引上奉る。それより都へ送り給ひけれど御命ありけるを、世をのがれ給はんハいかやうにつかふまつる人もなし。志ある吉田の何がしがもとへいらせ給ひ、元暦二年五月一日御年廿九にて御ぐしおろさせ給ふ。戒師は長楽寺阿證上人也。それより大原へうつらせ給ひけるを、そのあくる年、文治二年卯月廿一日法皇御幸有て、女院へ御対面ありけり。その

びのけ寺なんい行列ふるゞ供奉のくてまち
法大寺。花山院。土御門。ひさ六人。殿上人八人。
小西かくと。女院いつしうむりしあしくりや
ゆるさんなん。四位家の陪ふうゝぞ行ハ
さんなる
「たゝ〳〵も寿ふるゆ四ゝ四位供乃法大寺。四位家の相ふ多つゝんなる
「いかゝ〳〵乃ふたゝも寿ふるゆ四ゝ四位家の相ふ多つゝんなる
うくて女院いむなくく年月をおらゝせ行ひ。
もいるゝ〳〵ぬ四ゝ地いそてゝく。建久二年二月
中旬ふ。大原よおゝ〳〵く行ふおゝ〳〵せ行ふ嫁ゝの

ゝそゝひ。寿ふ寿ふ方ふなる
びゝて。月お交行せゝをゝとゝげ行ふとゝで 平家物語 文書
長門本平家物語云貞應二年春御往生御年六十
一。妙音ゝゝの化ゝ為ゝておゝ〳〵ゝゝ。
盛衰記云貞應三年の春ゝ年六十八ふゝくおい
ゝゝ也行ふゝゝゝ　今案。平家物語ふ女院の
行ゝい建久二年ゝゝ。又長門本及盛衰記い
貞應二年ゝゝ。ゝゝ大ゝふ相違せゝ。ゝゝもゝ
ゝゝゝ

▲ゝい後白河院よ行ゝ女ゝ行下ゝ
世ゝの大ゝい後ゝ院ゝ。ゝゝ後白河院ゝ

せらるゝにかくて久しく後白河の法皇
百練抄云後白河天皇諱雅仁鳥羽院第四皇子母
待賢門院大治二年丁未九月十一日誕生同十一
月十四日為親王久寿二年十月廿六日即位在位
三年嘉應元年六月七日落餝法号行真建久三年
壬子三月十三日崩御年六十六ト矣
院とハ葵上に注す
▲扨も此度先帝二位殿を初めまゐらせ平家の一門
長門国早鞆の沖にて悉く果給ひてハ女院
御身をなげさせ給ひしを取上まゐらせ
御命ながらへさせ給ひしが

東鑑云元暦二年三月廿四日午尅於長門国赤間
関壇浦海上平氏終敗傾二品禅尼持宝剱按察局
奉抱先帝共以没海底建礼門院入水御之処渡部
黨源五馬允以熊手奉取之按察局同存命但先帝
終不令浮御　下畧　百練抄云文治元年三月廿四
日於長門々司関為源軍平氏悉被責落畢前帝外
祖母二品奉抱幼主没海中内大臣父子平大納言
時忠卿父子前内蔵頭信基生虜也女房建礼門院
已下存命矣　先帝とハ八十一代安徳天皇をさす
百練抄云安徳天皇諱言仁高倉院第一皇子母建
礼門院治承二年十一月十二日誕生同十二月七

日為親王同十五日為皇太子同四年二月廿一日
受禪以関白基通為摂政同四月廿六日即位同二
年七月廿五日赴西海文治元年三月廿四日崩海
中干時八歳　兵　長門本平家物語云此御門受
禪の日い畫のけ庭のはるゝ孫の緣を大食
ゆゝ夜の内乃侍帳の内小殿入りうゝ侍
那須の時いゝ侍厨後小女房緣より絶入侍御
の日ハ百ゝの帳乃おゝ史男より奉る所在給
ゝ多ゝ同天変地変赤侍ゝ法華経ゝ
性を奏ゝゝ侍ゝ　下畧
長嘯子九州紀行云ゝ
なゝゝある事ゝ天帝のゝゝゝ第ゝ一門乃
ゝは殿上人局内侍ゝ侍ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
二位殿ハ大政大臣清盛の内室し贈太政
時信の女建礼門院の母し建春門院の妹
多大納言時忠の姉し
建礼門院ハ号中宮平徳子高倉院后清盛女安徳
帝之御母也　長門本云女院ハ年十八ゝて内

給ふ。女院の宣旨を下さんと。
十六ゝ后妃乃位ふ。廿二ゝ宣旨。
出家遂げさせ給ふ。女房ゝ院号ゝ遠礼門院と
申ス。今年ハ元暦二年廿九ゝ也
給ふ 文暦 盛長私記云女院も出家遂げ給ふ。此次
ゝとゝ右の内侍入海ゝ入給ふ。御身投
源次兵衛尉番ゲる。源五右馬允眤と云者ゝ
ゝ潜上ける。眤ゲ命惜ゝとれ髮ゝ
御ゝ引上ゝる。
拾芥抄云長門元云穴戸国 国造本紀云穴門国
造ハ縄向日代朝御世櫻井田部連同祖遠伎都美命
四世孫速都鳥命定賜国造矣
大和本記云長門国ハ山陰海の竜王の中ゝ赤間
ゝて眼の赤ゝ奥竜ゝ。大竜王乃勅役として
ゝ陽海へ行事ゝ。行ゝ家ゝ奥の山と
回ゝハ海路遠ゝ。行ゝ赤間中を跳渡ゝ通
水行其所を云赤目国其ゝ彼所の赤ゝと号
赤目澤又赤間関ゝ云不也是也。彼赤目の奥
龍命長ゝ門を掌ゝ此所ゝ住。後ゝ其処
号長門ゝ。 早鞆ハ門司ゝ云ゝ。赤間
関門司ゝ。昔ハ石櫃の ゝ下て長門ゝ
ゝ一ゝ。門司今ハ ゝ。一里乃

海上に浮かび漂ふ。門司乃地小祢社の号に彼波度毛祢と称ず云々

鞍祢は竜王乃養属なり。[illegible]

源頼世 右同の宮に門司の宮とのあり。ひいなのひどりなくを中ふ[illegible]乃ちひの乃ち穴のやうふ[illegible]の宮の[illegible]人家[illegible]。[illegible]

なを。[illegible]を宮后のつくさの伊勢[illegible]

なをなるふ伊勢[illegible]ひて[illegible]一夜の[illegible]ふ

供穴戸の山引[illegible]

なをなるふ[illegible]ぬ[illegible]

なひるさい[illegible]

▲三河守範頼・九郎右衛門尉義経兄弟供奉

東鑑云義経供奉内侍所、神璽、元暦二年四月廿五日入奉京都、納朝所、同廿七日義経被補院御厩司、八月十四日任伊与守、文略

百練抄云文治元年三月廿五日戊寅戌時神鏡璽自鳥羽入御朝所、権中納言経房卿、参議泰通卿、権弁兼忠朝臣已下次将等供奉、太夫判官義経等奉相具若宮御入洛、侍従信清相具院御車奉迎、兵従五位下三河守範頼ハ清和天皇十代後裔左馬

頭義朝子也母池田宿遊女也於遠州蒲生御厨誕
生因号蒲冠者矣　異本盛衰記云範頼ハ梶原が
讒言ゆへ。範頼の勘気を得て在伊豆国修
善寺景時又範頼ゆへて越伊豆景時父子三人
五百余騎にて押寄修善寺に範頼籠ける所を
焼ゆへ自害す。京時頼を誅め範
頼乃髪剃て長門へ流す範頼を欲ゆせんと
世の人うゆへ命ハ範頼を欲ゆせんと
乃範頼弟三河守範頼を大将軍にて六万
騎にて搦手にて攻る。三河守小奥に伏ゆ
紙丑丸と云童ゆ甲冑せて二位殿の兄弟
入ゆ。二位殿和殿ゆ九郎ゆ搦手二乃舞し
ゆ。起請仕へしてて面ゆひて一見ゆ一牧
つて百日ゆる百牧の起請云く。二位殿よ
ゆひ。ふ用して搦ゆ三河守切と搦
ひふ。大将軍ゆ搦ゆ三河守ハ
切と搦ひぬ。切搦ゆ人を切て。大名
小名性をゆる。其後ゆ東ゆ命時政を大将軍
ゆて三万余騎ゆ上せ。
右女房ふ同じゆ是ゆる

義經ハ屋島ヲ落シ

▲三種の神寶の故事

三種の神寶、寶劍内侍所也、但、寶劍ハ海ニ沈ム、神璽ハ内侍所ニ入ル。

盛衰記云神璽ハ海ニ沈ムと。常陸国住人片岡太郎經春奉取上寶劍ハ失ヒ、歳潮の徒糸弘ヒロ仰ク探求海底其後讃岐の老れる海人女ヨ探ル〳〵しもとも見ぬ〳〵

文畧　神璽ハ号ニ八坂瓊曲玉　旧事本紀云念玉作祖御魂明玉神作ハ坂瓊之五百筒御統玉上　兵

寶劍ハ霊氣記云草薙劍亦名天叢雲劍是也　兵

日本紀云素戔嗚尊乃拔所帶十握劍寸斬其蛇至尾劍刃少缺故割裂其尾視之中有一劍此謂草薙劍也素戔嗚尊曰是神劍也吾何敢私以安手乃上献於天神　兵

内侍所ハ八咫神鏡也。日本紀云猿女鏡作部遠祖天糠戸者造鏡　兵

霊氣記云八咫鏡火珠所成玉本有法身妙理也亦名辺都鏡亦名真經津鏡亦曰白銅鏡　兵

名法要集三種者一十種圓滿之霊是云八咫鏡二十種感應之宝是云八坂瓊曲玉三十種成就之加持是云草薙劍此三種者實而具權故有權實之勝劣者是也十種三種之霊德畢竟統御之神宝是云

神籬磐境無上霊宝是也矣　神皇正統記云ふ種
の神器世界を守護ふる日月星の天下の明主
後の月の神し。玉は月の精し。剣は星の気しる
ふ種は智仁勇の三徳を表す。神璽は万物
涌出の如意宝珠是也。宝剣は悪魔を降伏
源也内侍所の御鏡は正直を以て万境を照
掛ては一切を鑑て。一天の君を和め。下万
民を治むる人を教ふの法是也。名
恵の根源也　已上旧事本紀取意　私云此三つの神宝は神
と表するの代は授ひ給ひ給ひぬると。今

天皇の御下の宝小述べ給ふ。

●神代より三種の宝伝り給ふ事本朝の君と成る　警

大原の寂光院　大原は西山の奥にて
おくゝと聞ふ。私家よりは遠ふ
ま八の村を。都ゝく大原と云
寂光院は大原寺村ふ。此寺小建礼門院
の尊像第一の御侍の尊像あり。女院の陳い
寺乃厨のかしと。るゝ事あり。雲のおく
若い汀の櫻とて沈の門ゝ掃ゝ
今は沈もる　沢庵和尚石山紀行云起川
至寂光院本尊者地蔵菩薩也平清盛公之作ゝ

有安院厳容即建礼門院是也自西海入洛之後自東山麓又遷此山不満十年終於此院崩御成矣

法皇御幸をなさん　法皇とハ後白河院也

仙洞落飾ましまして称法皇宇多天皇昌泰二年落飾法名曰金剛覚又寛平法皇ともいふ仁和寺御室是也是法皇の始めし　御幸とハ漢江不楚云天子を行幸といふ院を御幸といふ望もみちをしらむべしといふ

海人藻芥云帝王ハ行幸法院ハ御幸親王摂家ハ御出と云也といふ

幸の字ハ天子巡行周之蔡邕獨断云天子車駕所至見令長三老官属親臨軒作樂賜以食帛民爵有級或賜田祖故謂之幸矣

有職懐中抄云行幸とハめでたきさいはひをもよほし天子の行給ふ所ハ幸をうる故ふ行幸といふ

長門本云法皇寂光院御幸の事頼ぞ篭て御陀洛るの御事とくおさせ給ふ思ひさうん御幸ありしハ有るう御車を下簾をかけてある近習乃人てハしらせてら後徳大寺右大臣公能御子内大臣実定右大臣実房当関白花山院太政大臣忠雅御子大納言兼雅侍従大納言成通御子宰相泰通三条内大臣公教

乃子大納言実雅・土佐門内大臣雅通・乃子宰相
中将通親・閑院大将・吉田中納言・[illegible]
[illegible]弁若原上人和歌[illegible]

▲[illegible]

[illegible]

▲[illegible]

[illegible]

▲賤[illegible]妻[illegible]の斧乃書捐の嵐猿の多

長門本云巴峡の猿乃一さけびきゝ[illegible]ば[illegible]の斧乃
書[illegible]　倭名抄云風土記云猨善負子栗危
而投至倒而還者也兼名苑一名猕猴・文選猿猿失
木唐韻猴猕矣　妻木ハ通小所少乃[illegible]

▲[illegible]

[illegible]

▲草顔渕ゞ巷ふたけさ[illegible]ひの行清[illegible]函原憲う
樞[illegible]　是ハ稿直[illegible]ゞ文かくつけさう。

半部小弘と

▲大納言の局　鳥飼中納言伊實女、五条大納言国經
養子也云々　長門本云、此伊実卿母、女系大納言
邦綱の娘、女子二位の妹、大納言殿と称申候
女子二位中将重衡の妻、前大納言邦綱卿、三女
山槐記云藏人頭重衡朝臣、妻、号大納言局　百寮訓要抄云大納言八天子喉舌
の官也、下のやうをよく申、上のをを下に伝へ
又下のおもをよく申、上のをを伝へ、しかるを
中世、令条ありもんしらず、始は人ゆくゑなし
ぶ、よりよくあくあくなし下畧

令義解云大納言謂納言王者喉舌之官也納下言
於上宣上言於下也　延喜式云天智天皇十年
正月五日始置御史太夫天武天皇元年八月改為
大納言　園太暦云天長五年三月十九日以從
三位京野為權大納言是權官始

▲孫し　摘ひ　唐韻曰摘香木也
漢語抄云之岐美
草根　○ものの沢さ孫もあるもちろん嘆をきの見のこ寺

▲びんるさ　びんるさとい作りるさ
孫ものよ云　びんるさ不ゆく人小あをといひ
▲悉達ちよい淨梵王の妃を出檀特山のさりさ

乃至其のさ　乃も長門本かくつけさう。
中天竺广訶陀国浄飯王のみ悉達をみ十九出家し給ひ檀特山に登り阿羅々迦广羅の
二人の仙人に法を学ぶ。雖行三十年成仏
給ふ　悉達八名義集云梵語曰薩婆悉達
唐言頞吉太子生時諸吉祥瑞悉皆具故太論翻為
成利西域記云薩婆曷剌他悉陀唐言一切義成旧
云悉達訛也此乃世尊小字耳兵
浄飯八名義集云梵音云首曷馱那或名閲頭檀此
云浄飯或翻真浄或云白浄兵
檀特山八名義集云梵音云弾多落迦西域記云旧
曰檀特山訛也兵

▲菓つくりかくよ雖行仙人よ
行人さを法ひく法ふ成仏るくや
提婆品曰即隨仙人供給所須採果汲水拾薪設食
兵　世尊成仏の日陽谷に法を仙人の意味を
拾
法花法をあらはす菓つくりの菓つくりを法
行基
▲菓篋ハ菓つくりを小法を。九を八因村小法を
▲法つくりの　牡丹の異名也
本草綱目云群花品中以牡丹為一芍薬為二故世
謂牡丹為花王矣　九雑組云牡丹正黄者不可得
正紅者難得矣亦有墨色者須苗芽時以墨水漑其

根頃開花作蔚藍色尤奇也矣

事物紀源云隋煬帝世始傳牡丹華而唐開元年中

宮中及民間競尚賞之自此有數品花矣

陳眉公秘笈云世謂牡丹近有蓋以国朝文士集中

益牡丹詩張公嘗言北齊楊子華畫牡丹極分明則

知北齊已有牡丹矣　或拾玉日本小上古ハ牡丹ハ

[illegible]

集小新院　崇徳院　[illegible]時牡丹と

[illegible]

藤忠道

[illegible]

世分牡丹と始[illegible]

[illegible]

[illegible]ハ牡丹と[illegible]

又一捻紅鼠姑百両金鹿逃共[illegible]

[illegible]

葉如茶糜多実而小辺如鋸歯三月開花金黄色圓

若小球一葉一蕊但繁不香矣　隷棠ハ園史及允

[illegible]花譜導生八牋等小其形詳

順和名小欲[illegible]

欲[illegible]

除醾とやなまりて川どろも郷〻除礦いろや
かなさし。川いとふかりて。そこ苔の色緑色をかゝ
まいやなまりてこそ〻

▲池水小汀の掃敷ものさて浪乃苔とて豆うちん
千載集春下。隆信製也 後白河 汀ミギハ 汐ヒガタ 云みこふ
かゝしてこそ〻ゆる時。多羽反小塚こそ浪人と
なる汐。汐と苔とこそ〻ゆるゝをこそ浪ひろこと
こそ。 盛衰記よい池水岩の寄柳敷しこそ
こそ。長門本云此ものの分乃汐苔小汐の苔乃あの
ものゝ敷ものをは浪しく法皇れゝのこそ浪ふこと
こそ

▲緑蘿リョクラの酒水苔スイタイ乃心作カキつけこそ。色ホ皆寂光院
長門本及盛衰記小こそ

の系乳をこそ

文選游仙詩云緑蘿結高林 兵

呂向注云緑蘿松蘿也 兵 毛萇曰女蘿カ松蘿也 兵

爾雅注云水苔ハ一名石髮江東人食之 兵

廣志曰空室妾人行則生苔蘚或青或紫 兵

○こそ〻こそ〻をもをもむゝのこそ小なこそ浪の苔也 定誠

二宇ウの浪蕚あり 長門本云西の心乃藤ヨ二宇の

苔蕚ゝり。則寂光流色こそ〻。

釈名云宇羽也如鳥羽翼自覆蔽スルカ也 兵 尸子曰天

地四方曰宇又屋四方垂為宇ト 兵 ゆ糸のあ方こそ

こそゞ乃の羽小似こそれゝ宇といこそ

▲夢破まてい夢不沙の香を燒樞落てハ月も又夢
位の魂をかゝく　寂光流の詠とゝ。徒とゝ。
平家物語盛衰記長門本ニハ文未考
俗くつけゝるそ本文未考

▲藜藿　涂くゝとゝさゝり　直鞚ゲ文を又家ハを
おゝゝゝり。藜ハ説文曰草也徐曰今落帚或謂
落藜初生可食兵　尓雅曰藜之科大為樹可謂帚
又疏云可為杖兵　藿ハ説文曰堇草兵
尓雅曰商藿赤似藜又灰藿子炊為飯香滑葉心有
粉似藜心有赤莖大堪為杖兵　左傳曰斬之蓬蒿
藜藿而共処兵　藜藿ハあらぶとゝあり

▲見ハ万里乃小路の中納言ゆくゝ
多家物語盛衰記長門本ニハ法皇の御供乃中
万里小路とゝ云ふ名見ゆ。大系曰を見るに
弘安の比の人ゝ。但し多家滅亡の時より遠ク後
の人ゝ。此万里小路資通ハを万里小路乃祖とゝ
号ゝ。人ゝ業上ハ小紀ゝる長門本ハ法乃中ハ
吉田大納言とゝ云ふ。見を万里の小路とゝ云ふ
百寮別要抄云中納言つゝさとる不大納言ハ
同ゝ。又ゆる人ゝも大略同多ゝ。若ハ負数四五
人ゝ有ゝて。法乃多くあて人ゝハ見も

十人しゝ。伊呂波字類抄云持統天皇元年丁亥
始置中納言官兵　拾芥抄云文武天皇元年以大
神高市麿始之兵

▲やあやあ小河の乃あそせ池いいうる者を
あそせ清い為べし　清少納言枕冊
月記云うゝひ芦也てゝゝ清ゆ。此あそせ
つゝめくのゝ。為かようなぬ。上下畧
按ずるに小ぜの禅尼とゝを畧しくせとゝ云
為。又一説小ぜおもごぜんを畧して姫ごぜ
尼ゝをてゝ云。又ゝをゝを畧しくせてゝ。
むりいあ小つゝゝを河内おの河のおた
ゝ。ゝ。ゝい称美の河ゝ。そ波い為ふつゝゝざゝ
人かゝ。河のゝゝ河のごぜんゝゝひ為ゝゝ

▲ゝゝ八信西ゞ娘河波の内侍ゞゝゝ果ゝて河ふ
山井三位永頼卿八代後裔越後守季綱孫進士藏
人実兼子也　正五位下少納言日向守通憲入道
信西正六位加賀掾実兼一男也母信濃守源有房
女也。諸道之人也。平治元年十二月十三日信頼乱
逆之時見天変兼知彼災瑞入大和国多原山未死
前入棺被埋同十五日伊賀守光保尋出即堀出斬
首渡大路被梟獄門畢兵　阿波内侍通憲女大僧
都澄憲妹也　已上大系圖

云内侍ハ通憲の孫・尊憲

の娘、北憲の妹、母は紀伊の二位、後白川の乳母し
ゝゝ　内侍の宮は玉葛よりを
▲極重悪人無他方便唯称弥陀仏　拾遺
正覚は源氏物語、閑寂は白樂天、つまりやはり
小町小野とて
▲中くよりは妄執の閑寂の為を　按るに閑寂の
為を閑寂の世とゝゝふいとゝ閑寂は為
閑寂捉小くは世界を云ふ
云時は言うるへし　今後学ふ為の
けるはいかゝ　ゝもえぶの為なるを
やすとて　上下略

二念の窓乃前小摂取の光明を終つて十念の
業の扉よりは来迎を乃往生を待つるふ
世俗念仏はつとめの外、ゆるがせにすべ
ゝも長門本小くつけゝ。
往生要集云聖衆来迎樂者弥陀如来以本願故与
諸菩薩百千比丘衆放大光明皓然在目前時大悲
観世音申百福莊厳手擎宝蓮臺至行者前大勢至
菩薩与無量聖衆同時讃嘆授手引接是時行者自
自見之心中歓喜身心安樂如入禅定當知草菴瞑
目之間便是蓮臺結跏之程即從弥陀佛後在菩薩
衆中一念之項得生西方極樂世界矣

▲大原や芹生の里　芹生の里ハ元芹生村乃事なり。近世勝林院村の内になりぬ。長門本小瀬郷と云

夫木 大原や芹生の里乃月ハ見しつらぬ家も住人かわらん　実家

▲朧の清水月かくし　芹生村寂光院の東南に有小泉。此所の人是を云朧清水ト。或ハ云おほろおほろの里。おほろの山ともあり

袖中抄云 能因歌枕云 おほろの清水ハ山城国大原郷にありといへり。或人の日記には山城江文の東にあり。良暹が大原の山庄の邊トなく

後拾 ほともなく絶る朧の清水底濁くも月の影ハうつりけるや　素意

▲小塩の初め色ハ　加茂の祭に用ひられてわかへると云し。此月あるを中の申乃日也と国家ことに云。是ハ欽明天皇の御宇に月に吉日をえらんで祭りし。又和銅にみことのりおりて山城国司見を検察せしむ。又中の酉の日乃祭に葵を用いて祭りしより葵かづらともいふ。夏の岩得しより葵をかけてかとうくかし。加茂社尾の社司。おの日より絶るへき不くへある。欽明の御宇より此祭始る　已上 岷江入楚

▲けふ寂光の静るる　寂光院を思ふらう。陰村の祭八十一月と

盛衰記云寂寞の柴乃樞なるハ世人数とく

荒たる人もなしとなり。説文云寂无人声也　廣韻云静也。集韻云无声

◆青葉まじりの遅桜初花よりもめづらしく
金葉集夏部云二条関白家にて人々に余花
の心をよませ侍りけるによめる。藤原盛房
「夏山の青葉まじりの遅桜初花よりもめづらしきかな

◆中くゝりたる錦を　源氏須磨に云ろや
竹ども声ゑみける。あはめくなるまでおかしう
ありつるひるしつら。所につけたるさまね。やう
かうとなすゝとく　やうなるとは様体の初道

◆ふけゆくも　難波小渡を

◆思ひきや深山の奥乃住居して雲井の月を
余所に見んとは　女院の御歌。平家物語。盛
衰記。長門本にはこの五文字あり。ひさかたの。
長門本に云住栖にとありきさればは大和絵
にかゝる紙屏風をたて。女院の御すまゐにおもひ
されたるなし　平家物語。盛衰記には此勝得に
書付てありしとぞ

◆さりつはある人の申しゝは女院は六道の有様を
まのあたりにしるとや。仏菩薩の位にもあらずしてかゝる
現ぜらるゝ事にもあらんかは
女院は西海にありし時の六道の有様を

四海一家と云ふを法皇の宮殿に比ひて女院の御方へ長門なる人は
海をへだてゝ六波羅を指よりさしもふかきふかの
月のうへにて世界をうかべ給へる六波羅をなを
りてひらけゝる
絡の気和の河と　和世隔よりの和
天上のたのしみも多ふ高の玉うてを
云ふ天竺のかをとゝ海よりあれ海なまい
飲ものせをい緑鬼ひと帝さうふをいかう
くりんの飛人と云ふ地獄と法のひうてひ
ある時しい絡ひとりとゝ弱の帝の高安

たい高安ひと只女も四人ひの遣ひとうるとゝ
ひなるゝ人ひのうちよりるるとゝ子孫和漢及ひ
裏紀長門なるよ絡せるとゝ
六ひい安達家よ絡ひ
▲さいつうう　さうのひと
万葉よ和ゝひのさうひ絡
抄云さうひい云ひとゝ
松葉子云さうひ絡

▲観身岸額離根草論命江頭不繋舟
羅維岳常詩也在和漢朗詠集
草根
●人の世ハ根と新とさうるうひ不ひるねあの花ひる法

▲天上の樂も為ふ白雲の玉葛なるうゝ星の夢月も消る
天衣の袖ろくの　長門ゆ云女院云天上の天衣のうすきゝ人
るかも明るあるをとゝ為ひ合せられるゝ
往生要集云今此娑婆世界無可耽玩輪王之位亡宝不久
天上之樂五衰早来矣　因果経云天人身淫不受塵垢
有大光明心常歓悦無不適意之事為欲火所煎福
尽之時五衰相現矣　天衣ハ羽衣小袖を
▲濕なるハ俠水せを　錦鬼乃のこゝろ
汝あるをのこゝろ　ふ白髪乃ゆ
海と尽くのあ分の月ゆあをとゝ　ゆ　祐盛法師
▲ふるとりつく　墨田川ゝ袖を

▲叫喚の罪人　三界義曰叫喚地獄者彼諸有情多受苦
已尋求舎宅覓藏身之處便入大鐵室中入已即大
火起由之焼身若痛逼切之時発声叫喚長時受苦
故名叫喚地獄又大叫喚地獄者在彼地獄受種々
苦彼従地獄出已便入鐵室之中遍覆其身猶如胎
藏発声轉大倍於前叫喚地獄故名大叫喚地獄矣
▲修羅道　屋鳥小袖を
▲駒の蹄乃ゝ　説文曰蹏足也通作蹄蹄蹋
也亦作騠矣　孫愐切韻云畜足四云蹄矣
ひづめとゝ小い地をゝ　ふゝのゑハひ
▲筑紫　榊川よ袖を

▲緒方三郎ゞんゝゝせ[illegible]

緒方三郎ハ先祖後世焼ゞ嶽の大蛇のゴ孫しい
ゝゝ。長門本云緒方三郎伊藤い赤鳳大ゞ
ゞ代の源也ゝゝ　西海の武士い皆平家ゞゝ
ゝゝゝゝ。今度緒方三郎ゝ先祖源家ゞ下味
ゝゝし　東鑑云元暦二年正月十二日豊後国住
人臼杵二郎惟隆同弟緒方三郎惟栄者志源家之
由兼以風聞之間召船於彼兄弟渡豊後国可責入
博多津之旨有儀定仍今日参州範頼帰周防国矣
又云同廿六日惟隆惟栄等含参州之命献八十二
艘兵船矣

▲薩摩　俊寛ゞ流ゝ

▲流罪者教経ハ安藝ゝゝゝゝゝゝ命ゝ平家ゝゝゝ
ゝゝゝ家期の供せゝゝて海中ゞ飛ゞ入
ゝゝハ平家物語の部ゝ　盛衰記云能登守教
経阿波国住人安藝太領子安藝太郎時家同郎等
一人右あ人ゝゝゝ右の船ゞ狭く海ゝ入ゝゝゝ
平家物語云土佐国住人安藝のゝゝゝゝゝ
安藝の大領実康ゝゝゝ小安藝ゝゝ命実ゝ
ゝ次命ゝゝゝゝゝ　盛長私記云安藝ゝ命
ゝゝ盛嗣組ゝ海へ投入ゝゝ。同ゝ命ゞ
良等萩野六郎菌田ゝ命あ人ゝ忠光家清

等組く前を取ルト文暑　東鑑盛長私記よい教
絵の法師なり。委しく屋敷より法師
新中納言知盛い沖なる舟の底を引と申しや
人よりてくなり。乳母子の家長ぞうしくとれら已
を使悔よ入ぶらう　知盛い舟弟芸ふ小松家長
伊賀ノ冬内左衛門ちとし。絵盛の家人。
冬家物語。盛衰記。長門本ふ知盛底をて
さうるもの。知盛家長ふとれ絵く海
入て冬家物語より。盛衰記よいうたふ
自害しく死と言。後と員さいう。

絵盛こ。盛盛有盛なも後と員く海よ入
乳母しい順和名ふめのおくと仰ど。作代ふ
巻玉姫うるやふ合色どのうるとうむ玉
後姫ぬうるとてそ作ふ。乳母の姫うう
玉後姫ハ巻玉の妹なまいめのおくしうと
花厳経云擾波羅蜜為乳尸波羅蜜為乳母兵
盛後小女院ハ武家の侍女ふく甲い紙ふ作
へうと。甲とやうしんとひしい絵くうし
ひと。　私ニ甲しやうんとつけうハ文の
除信ふく絵ハ絵多し。源氏須磨ふ
ちのふ小紫といふものふうう。

又長慎公の御記に
ものうらさつてとて。紫及とうさいと古
うらいろくあをく人の色なる物なり。
文の余情なく。紫とつる物を。うすくつる
なつけうる物なくし。青の内きい甲と
ゆゝんとつるもうすくうるを
▲紫色のうすくうるを　紫色い服衣と。うすくう
るを。
禁裏政要云鈍色諒闇之時用之重服之人同用之
矣　西三条加不離抄云　紫色いうゝ一紫ゆく
濃うと。花田濃と。又云青花小墨をつと。又
青紫色あり。青紫色い花田のうすきうと。尼公ど
の用る色とうく。花菖余情云服者の新乃
濃紫の色うゝ。うゝ用うるゆゆゆひをつ乃布を
用るとうく
▲今世青花もとゝ川の流を小い浪乃座ゆを新
いうくい　安徳天皇御幸記の時。内侍とし
いと。世尊と。白の帯うと下。白の帯うと小同
ゆゆ。和尚七歳。才六小袴。顔うく紫ふゆ
る色花。清初ゆの時乃白帯を色いを浅葱
及び。帯乃ふいうとて川の流とい浅
裳濯川八伊勢と。代々の帝天照太神乃御

なまいうくいとし。彼の屋ふ敬ひうとしハ龍宮
と云龍の敬ふもいとし
勢陽雑記云渉嘗濯川ハ内宮の神おろす流也
ありをとめ十数川といひ。後乃方ろうるん
ありをとめ嘗濯川といふ。あ川なうる
ゆう治川の恵多し。倭姫命世記云垂仁天皇九
十年天照大神五十鈴之河上ニ遷幸于時河際ニ憩
倭姫命御裳裾長計加礼侍ハ介ニ苗ニ於洗給倍利從其以降
号御裳須曽河也。渉嘗濯と云ハ神宮渉法
度の時ゆうの河乃名也。
長門本云二位殿ハ色を変ず。紫色の二ツ敬ふ
ものうてうとうと。八幡ふ敬ふ
というとうと。敬ふ二ツ敬ふ
宝剣と云極小拵。神璽と云極ふ拵
ひうとしいと。天帝之いづくへとし作ると
泳陛の浄土と敬ふ
敬ふて一人うて
下ウ畧　今案此ハ後乃
ありをとめ小宮
▲渉製ハ立田小河也。千鳥ハ蜜小河也。紫都ハ
天敷小河也
▲還幸　大原御幸　海人藻芥云還幸ハ帝王仙洞。還渉ハ親王

執柄をゝせゝく

▲女院ハ業の戸小　職原抄大全云女院中宮隠居
也天子母也天子母始居中宮者曰女院有門号未
得中宮位人並門号矣

西行撰

西行法師ハ田原藤右秀卿九代ノ末孫佐藤左衛門
尉義清ト云ヒ　後五位下右兵衛尉盛清ト
号ス　源大職冠鎌足ヨリ十五世の後裔　鳥羽院北
面侍　代々家ノ餘流　母大監物源清経ノ女也　ヨリ
盛清ハ武藝の達人　有道の名通シ　愚秘抄云西行
上人ハ世ノ常の産者ト云ヒ　天気も有ハ無
ト乃達者ト云ヒ　ヨリ　ヨリ　柿本の業継ぐ者ト
ヨリ　保延二年八月有事遁世ス　号ス
勅定
勅位房ト改ム　大室房西行ト　建久九年戊午二月
十六日ノ寂ス

「願はくハ花のもとにて春しなん　そのきさらぎの望月の比
とよみたまひし果して世に十五日といふにハあやまりなかりし
西行上人ハいつくにて果給ふといふ說文ハなく
只是を按するに續草庵集雜云西行上人終乃双
林寺にてまかり給ひし比二月十六日人々あつまりける日を
今續給ひしことを思ひ出て
「昔とて又春のかくれ給ひし其の二月乃春の西行
已上此說をとれハ西行上人ハ東山双林寺にて果給ふと
きこゆ　西行櫻ハ西山大原野勝持寺にあり。
世に西行寺といふ。又花の寺ともいふ。山家記云小塩
山ノ麓に草菴あり。勝持寺とて古跡風情が額(カク)わさ

やうなり。方丈の前に西行が植たると云つたへたる老木
の櫻あり今も根よりはへる枝乃末をとりて植をくられ
ちへもむかしおもかけくみさけかりしとそ
於長嘯亭ニ催ス花宴ヲ和哥之序云　藤原爲家
勝持寺乃花持かりくりて行給ふに。是も昔(コト)ら如
夕映(ユウバエ)の。色くに咲給へる梢の中ならぬ。西上(サイ)人の愛(メデ)
をりし櫻で。げにふりて苔(コケ)むせるを
又(タ)世傳說にして松尾との間に西行が庵(アト)をある紙の櫻
あり。此外に庵をうつしく侍なり。又後寺としなる。今
吉峰宗說善提院となる　又(タ)小倉山二尊院の北
小西行がすみる庵あり。山家集云小倉の麓に侍

なる小庵乃嘱なるを写く
「小庵ハ小倉の山乃すそちかく只ひとりすむ我なりけり　西行
此歌小尓たさかの奥なれ共とゝろふ、何も此あたりの事を云なるらん
書或集云西行ハ山小山居乃時、花小人あつまりきたるをみてハ
「花見ふとむれつゝ人のくるのみそあたら桜の科ハ有ける
かくよみしゆふれつゝ、そのよふ白髪の老人あらハれ
「つみといふハ、あらしの花桜ゝめたる人のこゝろ深山本を
とかしてう世ふかゝ、花乃精なりへしと云々
此桜ふりしつたふく此、謡を作なへし

◆なすちえふる桜かり山端の書小見えたん
桜かりとハさくらをとりあはくをいふなり右近小在て
◆かの桜小み着ハ下京あたり小依居仕着小そいひ
下京ゑてハ花条通より下をいふ、又此条より
二条ところを中京といひ、二条より上を上京といふ
◆東山地主の桜地主ハ田村相小在て、菴室自然居士小在て
◆百千鳥さえつる春ハ物毎にあらたまりゆく
此歌ハ古今集春上ふ入題しらす読人しらすとあり
下句ハあらたまれども我ぞふりゆくとあり
百千鳥ハ古今伝集の備要なり万葉ふ伝見ぬ物といふ
ちとりとハ人乃多くいふハ驚なし、驚ハ雀さえん

つりのをとしいくそれをこたえあり。さん世万葉ふよ吾部
門の桜の実りり繁百千年。此奇ようりていくい僧
るこ。只百千のをとこ云くも。桜の実い秋ある初こ。又
云くれもいはられぬ。只千をとこ云年のあるこ。それ
をこめの成へし。それよ千こをこ云んのあをい。りをと
いふ河をとくてあるこしいふこ
▲沈も弥生の空なれや河よりをりをく花の友
弥生ハ田植小沼を。やをもいをりをこ云ひ秋。弥生ふ
やもを重ていをり。袖中抄云やをやをてをいやをり
をてをこ云河も。やをこ云河を云世俗ふいやをもを云也をこ
▲夫春の花いと求なを水の横小沼庭の松乃風一声の秋を限をる
▲家本出たおのつをを見佛宴法
右いつをも東小よ出をり
▲花の時、高砂小沼を。機織千歳小沼を。落湯ハ野宮小沼
▲横花ふ小をを〜をの見川のふ乃ひをり見えて
古今集書上ふ入。要をを。家をを。帯りいを人四乃を花と
を。又ふ小をを〜もをを。袖を云家をれて作
をり時ふもをををれをこを。　後水尾院詠
歌大概抄云ふのうひい浦の家。ふ乃ふ小をを浦
をこ云字沼を。家ハ水かも男ふをを。ふのありひを。
家のふいをを〜をる小を。ふのうひをを花家をこん

へく。花の咲くる枝に、兵いうふもちそのさいやふ。
幽玄ふ而已枝しうく　長門の山に松植ふ法を
▲落花落葉ふ相濡ふ法を。人の花をしふ町ふ法を。西ハ紫ヨ
▲捨くなふ此世の外いなさ和をいつくう法の位あるる　法
是い右考歟来考
捨
▲捨くすむ世の友ていい花ひとり　杜子美カ詩山鳥山
花吾友千兵　意い別ふ友いなすあい花るを友
もちとと
▲花ひんとむきつ人のうるのこであくく榊の枝カふる
玉葉集春下ヨ入。西行ふ文字紀ふ今ととを。
河内ふ高野ふ入ふ人ふ花見ふ人ふ
ふくうれいとく。ふのふい人乃ふるとふん
ふり。あくくハ俗ふあつくくくくし
▲朱のりふ小歌治ふまつく
古
此里ふ猿寝しめ〜榊なちりのようひふ歌法ふて
▲人う貴ハ花の下如しく
新後拾
高野ふ花の下如月報〜白ひて浄さ袖乃雲風　登法師
▲理朱の人ふまめ為ふ沉めたんの花い拾りるる
西行ふ人ふ。行ふの集ふありふ来考
▲上人遊行御ヨ法を。此信を心殺生ふ法を
▲法世くふるもふくふるふの人乃ふあり

浮世くい在京のむ。ゑくいゑ居の仲と。ゑをすまして
乃を浮よ。浦の人い里ゑくもゑてもゆぐんのもを
さくん。うくさ世くゑ人。ゑくゑいゑそのゑ乃んのひく
けううぐれし
風
ゑくふとうくいゑまんゑ里ゑのうれえめ世をゑゑ仏て為を

▲老木の桜
為ゑのゑ七石を
今で乃ろ谷の老木の桜ゑ風ふゑて寒やへめくゑん

▲花ゑいくぬゑまゑうれた科ゑくいゑれをゑゑの法居を動をく
世詩ゑ林流ゑ浮を。いゑゑれい夕ゑた。朱ゑゑれたゑく。小
塩ゑ浮を家ゑいゑれをゑくつけう。ゑて中て音
日ごくゑた候家ゑゑ遠せり

▲草木国土皆成佛、芭蕉ゑ浮を。値遇盛久ゑ記を

▲花笑檻前声 未聽鳥啼林下涙難尽

是ハ百聯抄解ノ之侍く。仙ゑ文ゑい涙雑着くゑ。檻
前くい櫺干の前く。笑くい花咲く。花の咲い人の笑ゑ
小仏ゑれた。花ゑ声ゑるくゑく。待の意い花い咲た声
ゑ。名い咲た涙い乃ゑぐるくゑく

▲朝踏落花相伴出暮隨飛鳥一時帰

世ノ侍白氏文集三十三ゑあり。言ハ朝ゑ花を踏て李
二賓客くゑ花音くゑ伴ひ出。夕ゑい花ゑ乃ゑくゑひて
ゑくくくゑゑゑひゑゑくゑゑ

▲九重ゑ咲た花の八重桜　九重ハ田村ゑ浮を

金
●九そふ不ゝく白ハ今之楊のゝ風ゝ也　実物

▲迦陵頻の糸楊　迦陵頻とゝ上ハ五葉南。新町西。丑辺北。
迦陵辺ゝ東ニ有ニ楊伝所ニ迦陵頻別家也。今実ふゝ
ふ所是ゝ也。私云迦陵頻いろゝを指くゝふを
按るふ人今指枝の玄乃奥ニ信尋之を糸楊頻と
ゝ之ものゝ迦ハ実ふゝ之迦陵頻ハ迦陵信尋之
ふ所ゝ也　童蒙先習云ゝ之やのゝ

迦陵頻の糸楊ゝ

▲尺潢ゝ柳楊とゝ也ゝ　此ハ盛久ふ法と

▲錦ゝんゝ　紫煕ハゝゝゝふかゝゝ

韻會云紫煕ハ鮮明且衆多之貌也　説文曰煕孰也明也

錦紫煕　源順題ニ花色浮水上序ニ云蜀人濯文之
班固典引云備哉紫煕真神明之式也

▲千本の楊と他也。其色を本の名ふ乃ゝ之ゝ名ふ乃ゝ之ゝ

千本楊を他ゝ之ゝ名ふ千本と名付ゝ之ゝ名ふ千本流史
ふ本。ふ本の楊を他ゝ之ゝ風ふのゝ也。昔清和の御
時ゝ世の楊とあゝ千本他ゝ也ゝ

新千
風ふ見も古世ゝ之ゝ楊ふかゝ流の白糸　後ゝ多

洛西千本ハ世傳日蓮上人多の苦ふ修ゝ延元年迦葉
の名ふ所ふ千本の卒都婆を立ふ修ゝ千本
名ゝ之ゝ。但釈也を乃ゝふ乃ゝ卒都婆を立
ゝあれ見も遠世ゝ。

今案北野天神託宣云大内北野一夜生松千本其所建社以可崇天満天神云々依之此所を千本と名付る也歟

▲毘沙門堂の花盛り　毘沙門堂ハ今塔壇内有毘沙門町南北二町是世尊毘沙門堂の花盛と云ハ此寺のこと其旧跡歟寛文年中門主公海僧正於北山科地被再興也　應仁記云毘沙門堂光明峯寺摂政御建立花樹うるわしく　明月記云貞永二年二月廿一日毘沙門堂花半開　後愚昧記云應安二年二月十九日向毘沙門堂一見花ヲ矣

▲四天王天の眷属も是ハいかなるものぞ

上ハ毘沙門堂とあるものぞ。四天王天とつくるべし。四天王天ハ欲界の六天の家初め。一切の天所其楽云多一。

三界義曰四大天王一東方提頭頼吒天王此云持国天二南方毘留勒叉天王此云増長天三西方毘留博叉天王此云廣目天四北方毘沙門天王此云多聞天矣　持国天梵音云提多羅吒太論曰秦言治国主乾闥婆及毘舎闍矣　光明疏曰上外之元首下界初天居半須弥東黄金埵王名提頭頼吒又翻安民矣　増長天梵音云毘流離大論云秦言増長主弓槃荼及薜荔多矣　光明疏云南瑠璃埵王名毘留勒叉又翻増長矣

廣目天、梵音云毘流波叉、大論云秦言雜語主諸龍
及富樓多那、矣　光明疏云西白銀埵王名毘留博
叉又翻非好報又翻惡眼矣　毘沙門天八鞍馬天狗小後

▲上ノ黒谷下河原　上ノ黒谷ハ黒谷ノ北ノ方ノ山ノ中ノ浄土宗四箇ノ一本
寺也、名金戒光明寺、法然上人始住、比叡山西塔黒谷、
其後此寺再興、弘法専念之宗、故是称新黒谷、又
号紫雲山、古紫雲起自斯山之石上、其石今在西
雲院中、金戒光明寺ハ上人再興ノ時ノ以前ニ
ある名ナリ　下河原ハ永観堂門前ノ西ノ方ノ平ノ
地ヲ云

▲普遍昭僧正ノ浮世ヲいとひ花頂山　遍昭ハ花林
院ノ法名、花頂山ハ愛宕郡ノ也在、栗田山西青蓮
院東、今栗田ハ天王ノ社ノ東、山ノ禁裏ニ在、花
頂院ノ旧跡ト云リ、應仁記云花頂山ハ唐ノ天台山
を移して嶺ノ尾ノ山ノ雲の端ノ眺ノ見ルガ如ク
夕月数覺ノ花乃照ル　いとひくらす
宴ノ遍昭僧正ノ浮世をいとひ花頂山とうらぶ
あまりて遍昭ノ浮世をいとひ花頂山ハ花頂山
花頂山ハ別ニ花山在、清原寺山東、昔元慶
寺と云寺ニ、又花山寺ニ、今花山村ノ内ノ小
堂ノ法出リ、拾遺抄云花山ハ山法出リ、元慶寺

と云佛寺ありしより。花山ノ院ハ彼ノ寺にて御ぐしおろし出家あり。仍テ号ス花山ノ法皇ト。遍照僧正も住ス彼ノ寺ニ。仍テ号ス花山ノ僧正ト也

夫木
「咲と見てのりのまことを思ひ知る法の花の山寺」

◆鷲のミ山乃花の色枯れし鶴の林ならく

鷲のミ山ハ靈山を云。田村ニ注ス。鶴の林ハ双林寺ニあり。一説ニ釈迦をも云。佛入滅の時。双樹枯れて白き鶴林のごとし。此義ニ依て鶴の林と云。涅槃経云。序品云。爾時拘尸那城娑羅樹林変白猶如白鶴ノ矣

◆清水寺の地主の花　田村ニ注ス

◆松吹風乃音羽山　同

後拾遺
○夕されハ松吹風の音羽川おとりも涼し山の下道　後西園寺公

◆嵐山戸難瀬ニ落る滝津波

嵐山ハ在大井川ノ南。法輪寺ノ西。松尾須座記ニ嵐子山と云。麓より十町斗登れハ千光寺と云寺有り。号ス大悲閣ト。本尊ハ観音。御長弐尺五寸。角倉了誓坊開基也。則了誓の木像あり。當山絶頂ニ香西又六郎が城の跡也。又千光寺より二町斗ニ。其の処ニ昔ニ芳野を移されし時。勧請せる蔵王堂の跡あり。土人権現ノ垣とよぶ

戸難瀬ハ藻塩草ニ云となせの瀧。山城大井川の上也云々。

西行撰

今案ずるに新歌の滝は大井川の内にありと見えたり。古今の歌も是に同じ。或説に戸新歌山は嵯峨山の別号なり。

後古

○滝吹山のあるさのおもてをとの新歌の滝を戸新歌の滝に作れる歟 信

▲大井川わせさにちやかるらん。 百首に出る

後撰拾

○大井川わせさのあや波うんぬ風にふきしの寄るなく 寂蓮

▲春宵一刻価千金 新歌に出る 秀句 田村に出る

▲小倉の山に出る 小倉いさう二首流の後のよく

新十

○月の入る小倉の山に出るひとりさるささ小男鹿の寄る 法眼 弁教

▲花を踏て同じく惜む少年の春 二人静に出る

▲翁さひて跡なし

実盛に出る

朝顔

朝顔といふ源氏の巻の名也。花色餘情云源氏巻の名に月の影にうれぬ朝顔の花の色ありはてぬるかな

又源の網に掛る花しるしの中に朝顔のうれたきかな

りうとうく 依而以哥為題 詞 為巻名 叙朝顔乃

秋院とは桐壺の帝のはしめかた。桃園の式部

の宮乃女也。賀茂の斎の秋よりなりり給ふ 榊乃

巻に見えたり。帝父宮うせ給ひしより八歳の春

に成あり。是ふりて秋院は服うくあり居給ひ。桃園

の宮に成しくさ。もしめ秋に居給ひしに時より。源

氏、春ひとりけ給ひ。秋院あり居給ひ春さのく

朝顔

ふをつゝみて侍ひし。源氏
一紙の中の貞女なり。後ふに髮あつし侍ひしを
ゝ菜の葉ふ尼ゝ
▲かゝふ引着い本い都の着ゆくひしゝ紙ふおゝり結緣
都の字義ハ云ふ砂ふ記と。結緣ゝいゝまゝゝなげくゝ。
善導定善義曰曠劫來流轉六道尽皆經到処魚餘
樂唯聞愁歎声矣
▲身をゝくゝく後も待尺よ世ゝく紙をゝゝれぬ
此ふ名和泉ふ源氏ふの名。下句ハ紙をゝゝれぬ
ためしゝ者し。故院の侍時ふ石つゝ女ゝ源内侍
ゝてゝ。年の行ゝゝくゝゝゝ。源氏
和尚ハ侍ひしゝ。年老ゝく女ふの宮ゝ尼ゝ
ゝて侍ひ。此時秋院おゝ侍ひく。桃園の女ふの宮ふ
あの行し侍ひし時。源氏ゝゝひ侍ひ。此内侍
ゝあの侍ひくれ和倍の沈ゝふ内侍の尼。
[illegible]
ゝひし。逸安ふ源氏のゝ侍ひし。
▲逸ゝ法の行ゝくいなのさゝゝの名ふ名ふ名ふ名ふ名ふ
ゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
法後撰
▲一条大宮佛心寺ゝゝゝゝ
佛心寺ハ号平安山寅菴四六後集云号桃園山佛心
寺矣　和漢禪刹次第云平安山開山無象和尚法

海禅師塔ヲ曰正宗菴卯塔ヲ名ク三會中ハ石溪左無象右ハ
大林佛殿ヲ云覚雄室殿宸輪也矣 桃園を後よ寺と
す。れんちと名つく今は絶えぬ。其元桃園の宮
ハ今のれん寺をなるべしと
桃園ハ拾芥抄云世尊寺南保光卿家行成傳領之矣
岷江入楚云桃園在所一条北大宮西一条面中許
世尊寺南當時拘杞町勘師氏大納言宅也保光中
納言傳領仍号桃園中納言矣
多根
○花さけハ綿うけゐを桃園のきの右京しるれい
一条大宮ハ拾芥抄云一條号桃花坊矣
大宮ハ或説ハ大宮通の上。今宮のれい大宮検校とて
ゝて神ゝ。故ゝ大宮通と名つくとゝ。
説ゝ。昔大内裏の時。東大宮。西大宮と
て二名ゝ。今の大宮通ハ東大宮也。大宮と
別名也。其通路ゝ。
今案和泉の秋院果法ゝ源氏物語ハ是ゝ。
但此説ハ和泉の情此所ゝ。
ゝを作ゝ。應仁記云一条大宮。南無寺。れん
此寺ゝ。
墳ゝ。此義ハ
▲ハ萩ハ赤雅集注云萩一名蕭矣 楊氏漢詔抄云鹿
萩ハ赤雅集注云萩一名蕭矣 楊氏漢詔抄云鹿

鳴草ト矣　国史云芳宜草ト矣　辨色立成云𦱳ト矣
槿ハ本草綱目巻之三十六載木槿一名曰朝開暮落花又曰蕣又曰日及又曰藩籬草又曰椴又曰櫬時珍曰此花朝開暮落故名日及曰槿曰蕣猶僅栄一瞬之義也矣　又曰槿ハ小木也其花小而艶或白或粉紅有千葉者五月始開矣
今案右の名どもあさがほといへるあまた皆むくげの事也。古来よりとかくあやまりきたりけらし。　多識編云牽牛子和名為阿左可保木槿和名為年久計矣
又奥よ記そて

▲秋萩をおらではすぎじ月草の花摺衣露にぬるとも
新古今秋上ニ入。権僧正永縁の哥也。諸抄云月草とハ露草とも云。あをばなとも云。青花にてすりつけたる露がちにてはてぬるを。たとへこの月草の摺衣ぬれてもいとふとも。秋萩を一枝おりてゆかんとなり。とそほじといふ心也しとぞ
河林採葉云月草とハ百夜草と云。百夜花咲出るに此名ありと。所謂鴨頭草。鶏冠草。唐棣花。韓藍花。翼酢花。此等皆月草とよめるとぞ。古今栄雅抄云月草ハ露草也。月のひかりに咲出るに月草と云とぞ
▲うつくしく偲ぶ萩の露ふくまでいはぬ不知ひまなき
古今ハさきづきぞりし紫の由かりのなくて　旅萩と

おらていろ〻と宣ふやうん

此僧佛心寺ふ法く秋萩とあるているしところ。
右ふとしあるを。紫色乃情あるいんあるを云歟。
その萩乃ふまくさふくさいを此所ふ分る紫色
の右ふをとゝ法りぬるとゝ。紫乃色うとしいる
紫よいるうとしいる佩(フクシ)あり。紫ろよ源氏物語い
紫武部ゞ紫。是又萩い紫色の花ゝ。是よ法く
紫の色うのうく秋をとあるているしと云
ふを宣ふんゝ。法乃ふんを紫(サウ)しくゝ。
紫の色うと云いを人ふ集雜哥上ゝゝ人ふ

紫の一ゝ色よむさしの

萩雅抄云紫の一ゝ色よむさしの萩い法ゝ
むいまゝさゝ云なくまて。我ゆふ人ひとゝ色ふ。そ
の色うまてあいれとゆふとゝ。紫ハ女よたゝ乃萩
ゝ。萩の色うゝ。紫乃色うゝ。一ゝ色ふゝ色むい。ひ
ふうゝちまるゝ。むさしのゝさしゝ紫の此所
ふありくあるハゝうゝ。

河海抄云。紫武部い一条院の内侍乃ゝ。上東
門院へふゝせらるゝて。我色うのゝ。ありれと
ゆえしめせとアさせ法ひ乃ふうて。此名あるゝ又
武部乃紫したゝ色とゝ。私云武部乃萩く
とハ此ふを色とゝ色。一ゝの内色うゝと云河ハあゝ法。

朝顔

ふかい紫乃一りとの色うふく・むさしの・おうぎの葉・
こゝろしつまりさとし・むさし・紫の名所
▲咲花ふうつるてふるいつゝめたあ〳〵て色うさ今名の槿
夕顔ハ源氏の物語・六条のれ息所の方ふとうり拾
ひて置給ひし時・中将の君とてれ息所の宿
世ふかりしまに拾ひしく源氏のゝうけ拾ひし物語
れ息所を垂て分ふかをうつをゝ云名いつゝ
花ゆゑすくしりうさ中将の君ゝ云ふ
▲とりてゝやさるゝも有和をさゞ萩のゝをれ黄敷の
徳のお後世不まくうく常ゝうり・俗のゝある古分
はおくでいろ〳〵とゝ〳〵ふ〳〵てゝ色うさ今名の槿と
そ古分も有和をさ・萩のゝをれ黄敷あるハうう
めゝさゝ

▲ゑ河の家　海人小舟を
▲一句をも聴安ア仏果をえんとゝ
一句とハ聖教の一句ゝ・法師品曰閲妙法華経一偈一
句乃至一念隨喜者我皆与授記當得阿耨多羅三
藐三菩提
▲唐朝の古も帽上の紅槿〳〵て紅の槿を簪の上ゝ撈つ
曲をすつるたりあるハ　唐玄宗皇帝の兄・寧王
の弟子小・汝陽王李璡ゝ云人・帽を載さ羯鼓を打・
玄宗自紅槿を摘ぐ帽の上小乗ク音曲絶ゝ花ゝ

墜ぬるとハ。見鶏鼓録ニ（全文略）東坡詩汝陽真天人緒
帽著紅槿ヲ縦ゆる是也

◆狂言綺治　源氏供養に記を

◆いさゝかの露のゆかりやせん

伊
○新しくなるともみよりし子のよ振袖のいさゝかのかゝりすくよ

◆霧の籬に立ならせよなり　朝顔ハ源氏の歌に
是れハ霧のしもしまぬ朝顔のしほめるを秋院の色によ
〈同〉秋はてゝ霧の籬にむすぼほれあるかなきかにうつる朝顔
と云歌を実にふくませたり。新古今増抄云霧の籬とハ
ひきハ朝をへだつるものなれバ。霧も朝をへだつる故に
かく云ことゝ

◆まし槿の色添さえる花のかゝりを露ん　秋院のあるさ之是。
あさき朝顔の色こきハむかし紫色也。仍而花乃色ゝ
とえる

◆桐此寺とハ桐壺の帝の広所に武功のあひしわせし人の
継縁ひし桃園の宮の御四縁　此寺とハ佛心寺也。
妻くよき絶えて。桐壺の帝とハ延喜になぞらふる也。武功
の人ハ桐壺の皇子。槿の秋院の父也。桃園と云所に縁
ある桃園の武功卿とハ申也。秋の末に果縁と
為云の思ふにかなう。是朝顔の題也　朝顔ハ云
かの月にあかくなるその宮に目をとゞめさまひぬるをと
河海抄に実ニ二品式部卿宮敷国と云ふ也。寛平

分ぜらるる也。延喜五年九月七日小夢
を、是を復し、初度の式部ハ小ふるをとゝ。大和初度
より桃園の式部ハ宮うせ給ひつゝ、はてゝ長月晦日小
ゆるとゝ。是をくわしくいふ。又ハ祇園小桃園を八保光
中納言傳領仍而号桃園中納言今案敦忠親王
の変歌とゝ。つゝ是を号すゝ
式部ハ職員令云式部ハ一人掌内外文官名帳
選叙礼義版位記校勲績論功封賞朝集学校策
試貢人禄賜假使補任家令功臣家傳田事兵
百寮訓要抄云式部ハ才一の親王是小ゆゑ。
ものゝ人ハ小ゆゑ。親王も宮をの人
ゆゑ。内外の文官のゆをつゝ
ゝる。兵部ハ武官をつゝ。式部ハ文官をつゝ
さゝるゝ

◆其侍良女のゆゝ賀茂の斎小俗して槿の斎
院とゝ　槿の斎院ハ桃の斎小賀茂のゝゝ
小立ひゝ。落云の事小父宮果ひ。そ氏服
ゝ。斎院とゝ小ひ。桃園小俗ゝ。賀茂乃
斎院のゆ。宮家小ゆゑて。良女の字ハ井筒小俗を
◆光源氏ハ小ゝ小家の侍をゝけゝも赤と祢磯小
かゝゝをゝてゝびゝど　はゝゝいかゝつけゝ。斎
院ゆゝ小祢磯ゝゝつけてゝびゝ俗ゝど。え

源氏ハ菱ニ小波を。うけまくもハ紅波小波を

▲たちまちふらく紫の色ふかくさく作ものを

秋院ハ真心をそそ[illegible]ふかく源氏のたりのんかくさ。

紫ハ女小比しして秋院の母を以て。紫ハ根をさ

さねを深るかゝよ色ふかをくづくしつけよう。

菅三呂詩蘭蕙菀嵐摧紫ヲ

月情○秋風の紫ふくるゝ村小附うゝ多る袖ぞ多けさ

▲牽牛花　牽牛子花ハ。あさがほ。古今集

小ふかゝごとゝあるる是ゝ。陶隱居本草注曰牽

牛子ハ出於田舍凡人取之牽牛易藥故以名之ヲ矣

下学集曰宋ノ人詩槿花籬下點秋事早有牽牛上竹

来以此詩意見則槿蘂与牽牛各別也牽牛花本之

名藤生花狀如遍豆矣

▲遊子伯陽とゝひし人偕老を祈るる多二八之比乃旬之花

小玉兎を老して　鴉鷺記云瓊小吏婦ゝ吏を遊

よゝゝひ婦を伯陽ゝ候陽ハ之比の旬ゝ。此文のゝハ遊子十六歳。伯陽ハ

十二より吏婦ゝ多ゝて多ふんさゝ切ゝ。とゝ小月を

老ゝ多ゝ。暁ハ月の入多を多ゝて多ゝ多ゝ。夕ハ月の出多ゝ多ゝ多ゝ

九十九小ゝく死ゝ。遊子ハ小くゝ多ゝ。伯陽

ゝゝ多ゝ行小。ゝ多ゝ。夜伯陽鵲ゝのゝく。ゝをゝひ

ゆゑれば。遊ぶとふなけさて。石之ごとく死ぬる。天
星となりて烏ふのりて天をとをひめて。張騫ふの
ごとくして。河をつたてて居さうさ。されば帝釈毎日
此川をあをぎ給ふ。ものいれありて渡り
るをゆるされを。去りしとい。七月七日ふ帝釈兵
法堂へ出給の日ふく。あををあをぎ給ひをしく。此川
を渡りるをゆるさる。年ふ一さひあるとい人間の
ゐるよ一日一夜く。此時烏しく鵲しく羽をあをへて橋し
しく。彦星織女をとをとを。鵲の橋しを
玄兎ハ月の兎名也。玉ハ美称の詞。張衡霊憲曰月
者陰精之宗積成為獸象兎形矣　陸佃云兎吐也
明月之精視月而生故曰明視矣　月を兎と云ふ。

▲牽牛織女の二星　晉傅玄擬天問曰七月七日牽牛
織女會天河矣曹植九詠注曰牽牛為夫織女為婦
織女牽牛之星各処一旁七月七日得一會同矣
文選張銑注曰牽牛織女二星名隔天河相望婦人
自恨矣夫離絶矣　述異記曰天河之東有美麗女
人乃天帝之女機杼女工年々労役織成雲霧綃縑
之衣辛苦殊無歓悦容貌不暇整理天帝憐其獨処
矣河西牽牛之夫婚自後竟廢織紝之功貪歓不歸
帝怒責歸河東但使一年一度矣牽牛相會矣

▲烏鵲紅葉乃橋　玄肯抄云紅葉の橋ハ鵲の羽をあ
らべて七夕を渡し給ふ。是をよめる羽の橋ともいへり。
曉の別をうむ湖水此羽を水深うを烏鵲
紅葉の橋といへり。冷泉流伊物注云織女七
月七日ふあふよ。紅葉の橋を渡すと云ハ。是ハ実
の紅葉ふよい此ぞ。七夕のあうね別をを歌く海の紅
葉ぞ鵲の羽ふをて紅葉をを紅葉乃橋と云。
是ハさゝ鳥の羽をて紅葉をを。さゝ鳥羽
をあうくて橋とををしうく。　淮南子云烏鵲塡河
而渡織女矣
新子　○天の河ハ橋とををしうの紅葉をを紅葉の橋とををを

▲朝開暮落渾閑事祇要人知色是空
是ハ事文類聚後集僧紹隆色別是空の意を作る
待をう人知色是空とをもむ。一朝開暮落ハ槿の一
名。閑事とハ徒るとをもむ。人間ハ〳〵くさうををを
此槿乃花のとを。色ふあ〳〵れをるの名をを
とふを。

▲色則是空　心姚ふ法を
今案世間色即是空の文をををるふハ槿をふ秋院の
孟深抄ふあるうををうふ。秋果て霧の中の花ふ也をををあうををふうる歌
色即是空を視し給ふとうふ世間の甘き夢を槿上をを

つけうるこゝろ

▲朝菌不知晦朔蟪蛄不期春秋

是ハ在荘子逍遥遊篇本文ヨハ不知春秋ヲ云ヒ注曰朝菌大芝也亦名日及生於糞土暮生見日則死彼但知有朝暮而已安知有晦朔也蟪蛄寒蟬也春生夏死夏生秋死不見四時之全矣　淮南子曰注曰朝菌朝生暮死之類也生水上状似蚕蛾矣

朝菌ハあさの蛾ゝ虫のなゝ二ゝあるを見めゝし。蟪蛄ハ蟬の類。法師ゝ云ゝの蟬乃春秋をもゝぬもゝをゝゝゝゝゝ世ゝゝ

▲ふゝゝの花も沈ふハ枝ゝちぬ　白氏文集曰松樹千年終是朽槿花一日自為栄矣　此槿花もむくげの

▲こゝふゝゝふるてふ桃を乃宮もゝ拾

○こゝゝゝせゝふるてふ地の今ゝゝゝゝゝ

▲夢の中なる夢の也とゝ

荘子曰方其夢也不知其夢也夢之中又占其夢焉覚而後知其夢也矣

○孫乃世尓又孫祈とく夢枕夢のうちゆめを見るうゝ宗長

▲夢ゆめ国土悉皆佛心の世佛寺い

仏会寺を造ていく。夢ゆめ国土の文ハ法花の所多く。

芭蕉ゆ紀を

▲野分乃風　松風ゆ法花

三位中将重衡ハ生田の森の副将軍ゝ有しと。一の若ゝて庄ゆ助家ゆ捕ゝ義経相具しゝ上洛ゝ。京都遍曷の用。黒谷法然房を請ゞ受戒し給ゝ。寿永二年三月十日。桃原ゝ平三宗時ゝ具せられ。絶会へ下られる。絶会ゝていゆ。猪野ゆ宗義ゝ移られく。元年より伊豆ゝ囚ゝ居ゝ。ゆ。南都の大衆ゝ奈良ゝ焼ゝ。源三位入乃の孫。伊豆ゝ義人ゝ受戒ゝ。新薬ゝ作く。作ゝ奈良ゝ焼ゝ。文治元年六月廿三日ゝ於木津川道本三位中将依武衛御免有ゝ休浴之儀ゝ其後及東畑

之期、称為教法、被遣藤判官代邦道工藤一藤祐
経等、官女一人（手前）等於羽林之方、新被副遣竹葉
上林已下羽林殊悦遊興移剋、祐経打鼓、欲令様、
女房弾琵琶、羽林和横笛、先吹五常楽、為下官、以可
為後生楽由、称之、次吹皇鼎急、謂往生急、凡於事莫
不催興、及夜半、女房欲帰、羽林暫抑留之、而盃及朗
詠、燭暗、数行虞氏涙、夜深、四面楚歌声、云云、其後各
帰参御前、武衛令問酒宴次第給、中略、武衛又令持
宿衣一領、於千手前、更被送遣、其上、以祐経、邊鄙士
女還可有其興、欲御在国之程、可被召置之由、被仰
云云、祐経頻辞、羽林是往年候小松内府之時、常見
羽林之間、于今不忘、猶好歌、已上

▲豊の給余反の御内より特野介宗茂
給余反の御朝にて云云、給余より次故小給余と
給余の特野より宗茂とそ
将軍家譜云、治承四年十二月鎌倉大倉御新造亭
有移徙之儀、出仕侍三百十一人、東国見其有道、推
為鎌倉主矣　特野介宗茂、伊豆国住人也
二階堂系圖云、宗茂、特野介茂光子也、伊東祐親甥
也矣　一説云、不比等御子、治部卿七曜後葉工藤介
茂光子也矣

▲故に相国乃ち重衡の出家一の石の合戦より十捕

をもつて。佛原法師を。一の名い忠義よ沒を。某の家ハ

俗体よ沒を　　公卿傳云不三位中將重衡太政

大臣清盛公五男母贈左大臣平時信女号従二位

時子ト矣　東鑑云壽永三年四月八日本三位中將

自伊豆国来着鎌倉仍武衛黙郭内屋一宇被招入

之將野介一族郎従等毎夜十人令詰番守護之元

暦二年六月九日被渡源藏人太夫頼兼同廿二日

被遣南都東大寺依衆徒申請也明廿三日殞頸畧

盛衰記云南都の四さ[illegible]岩の陰よて潛よ中ねの

前を落を。夜時分よく京[illegible]を連[illegible]よの名を。日ぬに

おり[illegible]ら小の方一ゆ。前い流れのよ一沒さ[illegible]ら。一

説よハ京畿よて首斬。其後般若寺の辺のりさよ

大卒塔婆を立く。法然よ尋をさ[illegible]沒を[illegible]

を衛を生捕るハ。平家相伴よ一の名よて左の四郎

ら家を捕之とる。盛衰記よい左ハ三郎家長を

捕とる。東鑑云壽永三年二月七日平氏一谷敗

軍時策馬出一谷之館或棹船赴四国之地本三位

中將重衡於明石浦為景時家国等被生虜矣

長門本平家物語を一の名よて左の四郎

とハ[illegible]ら[illegible]ハ。[illegible]ら[illegible]ら[illegible]を衛を

お[illegible]て。さ[illegible]ら[illegible]て鞍のお[illegible]よ[illegible]て。我

分い字易よ字かてちんよ云くてすかりつる 文畧

▲朝敵のいるゝといひつゝ　知歌といふ子あの一族を

指くゝく　知とい指ふ中之湯石よ浦ゝて　東鑑云

廷尉云朝敵追討使暫時逗留可有其恐不可顧風

波之難矣

▲彼千寿の糸とゝいよ　細乃長ゞ娘まてい

千寿の糸い髪、河国よ越の長者ゝ娘ゝ。長門ゝよい

河の宿の長者ゝ娘ゝ。長の字ゝ長い娘ゝ紀ゝ。

東鑑云文治四年四月廿五日於遠江千寿前卒去

年廿四其性太穏便人々所惜也前左三位中将重

衡卿向之時不慮相馴彼上洛之後憑慕之朝夕下

休憶念之所積若為発病之因歟之由人疑之矣

盛衰記云子六系ゞ姫よ。伊王の前と云女も。千寿

と共よ中務よりつゝさ系ゝとゝ。中務果ひて

後。三年の遠忌よ勝をもつて尼よゝる。千寿い廿三。

伊王い廿二。一所よ居宅をむすび。往生をいのり居 文畧

き。衛千寿の前と泊妻の河の音さとて。相思の数

恩寄よあり。大さ今の子四よ似く内外黒髪。四よ

梅、花の苔絵ゝ

▲琴の音ゝ聞てかとばるゝ　ゝゝゝあづまやめらん

東琴ゝいちんとて　ゝゝゝあづまやいつゝ。系ゝ

東路ゝかくつけゝ。あづまのやのゝ河字と

和琴を東琴ともいふ。琴の羽衣よ
ばれを　和琴一名東琴琴體似箏而短小有六絃万葉
集云梧桐日本琴一面　兵　河海抄云和琴は二神
作りしめ給ふとぞ　毎名抄云和琴いえ弓六絃とも引
歌　卜部兼邦百
首抄云琴弓六絃を一にまとめて合せて管を
絶てて色をそえて引なり。琴をもてあそぶなり
花鳥餘情云和琴は伊勢物語好色の二神の代
よりいてきたるなり日本紀をよみ侍
をそ又大の字尺の大距大神のうりはらひ神あら
いてさくるとも云へり和琴はうちやうをあらへて
つるとうらなるとも云へり

とも云へり今の代亟のはしらとくらのはらをう
つかるるゆゑなるべし　詞林采葉云
和琴者依為本朝之歌益云柏子調嵯峨天皇班曲
傳尚侍廣井女王其後中絶而承和御門召慈賀善
門於階下傳其曲給兵

○東琴を乃洞とうらしらくしものといふ　中務親王

◆ふる雨乃花の樹ぬれさえ。秋の月の水底よ流むも

ちい世王の盛衰。辛衡の身のうとをうら。　秋夜長
物語云文をのもの樹ぬれのうい上求善提乃
樹とをうくめ。秋の月のあ底よりうい下化衆生の

初とあ〜いもてこそ

▲法眞のたのふよ塵ぬ面の音淫をさひらわしもい

法眞よたのふの鈔をふかくつけう。法眞い自然

居士よ淫を。長六文云面淫をもむい面の淫ろをこ

。作ちみく云ちんむ墨ふ面淫するむ文ちのを 面淫

▲m機昭を訪くりさうぐすうこひ

機昭こ云淫いうこうあ〜さくこひ云ようるい

を。機昭の二字よいたふふてちとあう。 楞嚴九曰 訖

露人事不避談嫌矣 涅槃狂曰具足智恵預見識

嫌矣

▲弟ハ墨槿花一日の榮 朝就よ淫を

▲命ハ蜉蝣のたのふふ仏ふ

淮南子曰蜉蝣朝生暮死而尽其樂矣 本草綱目

時珍曰蜉蝣一名渠畧似蜻蜓而小大如指頭身狹

而長有角黄色甲下有翅能飛夏月雨後叢生糞土

中矣

▲心ハ蘇武ガ胡国よりうん岩窟の内ふうあうんく表

色をちんぬ志ていあうりがうこうふて欲を忘ぬ墨ふ淫ら

前漢書列傳二十四曰蘇武字子卿杜陵人武帝時

以中郎將持節使匈奴草干欲降之迺幽武置大窖

中絶不飲食天雨雪武臥齧雪与旃毛并咽之數日

不死匈奴以為神乃徙武北海上使牧羝羝乳乃得

帰武杖漢節牧羊卧起操持節旄尽落耶帝即位数年匈奴与漢和親漢求武等匈奴詭言武死常患教漢使者言天子射上林中得鴈足有系帛書在某沢中由是得還拜為典属国秩中二千石賜錢二百万公田二頃宅一區武留匈奴十九歳始以強壮出及還鬚髪尽白至宣帝時以武著節老臣令朝朔望号称祭酒年八十餘卒後圖畫其人於麒麟閣法其形貌署其官爵姓名已上文畧

今案ずるに云ふ是へ廣利が

ゐを伝てやうやうと云カ如し。史記匈奴傳に蘇武明

月より四小漢ゐ之万騎ゐ之

一万騎の首を斬ると云者ゐ之を以て蘇武と

漢へ送ると云ふ是ハ次に弱ぬへし

▲縲絏の責をうゐ　論語公冶長篇曰雖在縲絏之中朱注曰縲黒索也絏牽也古者獄中以黒索拘牽衆人矣　絏字又作紲韻會云紲長縄矣

▲琵琶琴をもとゐ

琵琶者　釈名曰推手前曰琵引手却曰琶故因以名矣　唐書樂志曰自下逆鼓曰琵自上順鼓曰琶矣　文獻通考云傳玄琵琶賦曰漢遣烏孫公主嫁昆弥念其行道思慕故使工人裁箏筑為馬上之樂今観其器中虚外実天地象也盤圓柄直陰陽叙也

柱有二十二配律呂也四絃法四時也矣

▲其付ふる立よりて妻戸をそうくと押ひらく

さらくハ轟と云。妻戸ハ蔡の上ハ沒を　長門本云

陽成の妻戸をひらめかして。これをあらはすくんとや

ゐれハ。中ねとハつのみくあるれ給ひく。是ハ後をと

きゐれハ。女ヤス。ゑ乗。作成ゑ給ひてひくく

▲ハ蓋の退風ゑ乗ひら　蔡物の白ひと。源氏物ゑ

蓋云ハ蓋の内の退風。ゑゑめうくゑ吹ゑかりてゑ

▲花の散人ゑ乗うくゑうくゑ

花の散ハ花落花云田村ゑ沒ゑ。ゑくゑんくハたゞひゑ

ゑハゑくゑ是ハゑるをゑ。宗物集云樂時世寄乃

散ゑ散散ハめゑゑくゑゑくゑ吟叫ハ先生を隔つ色ハゑゑ

ゑゑゑゑくくくく慈行者ゑ　上下畧　私云ゑゑゑ物語

ゑゑゑひかゑりゑゑくゑられくくいゑ河多くゑゑを

暑くくゑくゑゑんゑくくつゑゑなゑくく

▲ハゑゑゑくくゑゑゑゑ　函材集云あゑらゑゑゑハ根初

ゑゑゑゑ。白沈と云ゑくく又ゑくくゑくくのゑく。

又云ゑくくくの俗ゑ世ゑハのゑゑゑゑゑゑハあゑゑゑく

左傳ゑ咲。ゑ云虚海賦ゑ暫。江文通上書ゑ蹔。日本

紀ゑ天折　儻日　忽。色葉字類抄ゑ歟忽　倘閑と云

ゑ。ゑ墨ゑゑゑくくゑゑゑゑ新人ゑひとゑくゑん後ゑくくゑゑを

▲又云ゑゑゑ辺命ゑゑゑ仏像を亡くく人行をゑゑく。釈

千壽

▲高の罷を累とする。前業なり行なうべし仏と

百練抄云治承四年十二月廿八日藏人頭重衡朝
臣追討南都ヲ中暑今日東大寺真福寺堂舎僧房不スル
残二一宇悉以焼拂仏法之滅亡偏二在リ此時一ニ矣
私云南都又タ一味ニ〳〵くゆるの讐と成ぬ。宗衡
よ作て南都をせめ。仏像をやき数多の人をころ
さる。況高の罷と云況主命の罷と。昔より今此
ひとりをのみなるべし

百練抄云養和元年壬二
月四日入道太政大臣薨天下走騒日来有悩身
熱如火世以為焼東大真福之現報矣
盛長私記云大庭平太景義云抑今度重衡卿を衆
徒より被下条本意なきよしあるべきか。甚以如何。
京良房上の変い。宗盛卿の慙愧嘆恚の極史の殘所なれい。宗衡の罷と
ちくうべし 大暑

▲空蟬の書衣いと焼よ沒を。ちつるれかの変い杜若よ
沒を。水鳥川の八橋い同杜若よ沒を
かけぬ情の中くよ　うけぬ情といえるまことをなり。
中くといえるよしなるべし云何よかよつ
▲今日の夜中乃夕の空四つまづを覆めんと
つれくといい宋朝なる変と。但宴よ云ふ法をくい
ちひさ変と。伊物去名およ法師と云。

明心宝鑑云得失榮枯總在天機関用尺也徒然矣
盆經新記云立今癈舌必不徒然矣　技業隠逸傳
よい家實の字を清きぐとよませう
玉藻　つもくしあるもの
▲樽を抱てゐうつ　礼記曰礼始飲食為汗樽杯飲
注曰堀地為樽矣　菅家文草云浮酒滿罇矣
▲くんさる盃の　寄老人
▲羅綺之為重衣妬妊情於機婦矣今依一行朗詠い
寄老小弟の巾仏。此侍を依せ。愛人をも守る（一とのい
巾拭ゐうり　菅家文草第二早春内宴詩序曰羅綺
之為重衣妬妊情於機婦管絃之在長曲怒不[illegible]
伶人矣　菅家御作也本朝文粋第九巻入又和漢
朗詠集巻也。依而只今依一行朗詠なり。
平家物語云三位中将此朗詠をせんとい。小弟の
天祥毎日三度うけつて。守らんとちうせ行とそ
長門本同之
右、序の心い羅綺いうもの。重衣ぬきき衣と。さ
もうつうさき衣をれた。此英女のるよいたきき衣
とせうく。機婦といい機をる女。此英女の気力ゐるさん
よい家ゐく。きく情ゐるくもゐまる衣卯。機織女を婦
とし。長曲といい琴。絃の長くくしまるもの。只も此
英女の琴ゐるくしまるもの。巾も此
英女の琴ゐるくしまるもの。巾も此

らぐらるるとつくさとうりもの。作人といふ人と
和漢朗詠集ハ四條大納言公任卿之撰ぐる処。上下
巻くるる。若いかをつけくくしひらるくこと。和漢とい
ふ。土の侍。吾朝の侍并に和歌を集め。撰ひ作るか
故ふ和漢といふ。朗詠といひ集よ秀逸の侍歌
あるいは人名を作ぶ。作て朗詠とくこと　文選天台
山賦曰朗詠長川注朗猶清徹也。又李周翰注朗
高也　或抄云大納言公任卿ハ大二條関白教通
公を養ふとう。此朗詠集を引出物よ撰ひ。視の
蓋よ入くと作ふくくく

▲十種の伝授引摸ふて朗詠集をかるて引
和歌抄云十巻の前ふて十巻くくこと引摸ふくく
云朗詠て。極楽往生の人ハ。皆作詩の名号とく
ふべくくいふくくく　盛衰記長門本同々　文粹十二云後中
書王談極楽寺文云雖十悪兮猶引摸甚於疾風披
雲霧　兵　ふも朗詠集よあり。かるでるとく云ハ
和琴をかくとい。琵琶を撥るといふ。ふるてるとい
くくふるでるとく云器借こ。奉をふもうるはくくく
云ふるいるで。元引物の巻を奏ふると。ふるでるとい云
▲津の国乃中田の河ふ分を捨く
中田川ハ摂津国。敦中田村よあり。小川と小ふる
流ふ。布引の滝乃流きこ。津ふ国いふ砂ふ流て

若津の玉よりも世をうるはしうるなり。それをよび男二人をうる。
一人は田玉その田乃間ふかもし男。妹は蒐系よりをんなを
うる。今一人は和泉の玉乃人。妹は陳努とをんひとりなり。
世よ惡あさうしてうるなり。世をんなをうるなり。世をんなをうるなり。
人をうる。世田川よりをもをなげく死よりなり。妻しくた
和泉よりをうる。長よ依て世田の川よりを捨てよ
ばくけうる
指送忌者
○いう沙津さんの唐を見くて世田の川よりを捨てよ

▲森のもとに乃木の葉乃落葉乃落たるを見れるを
京衡は世田の杜へむりひ行ふ副将軍と。もよも責
落されたり。世田の淡い海乃のもとあり。義とうあと

○世田川あの秋さらうて本葉をおろる杜の下に

▲籠堂は花筐より後を。棒ろは屋敷より後を

▲何方もあるを重ることくくて

文選南都賦曰天以日月為綱地以四海為紀兵
歐陽堅臨終詩曰恢々六合間四海一何寛天網布
紘綱投足不獲安兵

▲のうれ蓮ろう浪鯉の　浪は蝕より後を
○夫
我恋は浪の河郷の作るを鯉乃をもんうをせうろう

▲河越の重房ぶよより後ろんの外の敵入
河越重房桓武天皇後胤武州河越重頼子小太郎
と号す。義仲の男也　今案是は京衡一の若ろう

殺入のるを以て、家小を房ゞより小船にて逃るゝ
いぶり、一の首を斬て、京都に送る。京都にて義経相模
一上洛し給ふと、供に是れ八島の大臣宗盛卿乃
ゐとを取て、ちか元、此時い京房共より下向を、
平家物語云寿永三年二月十九日に捕本三位中
将重衡、新一ハく大路を渡さる。小八葉の車の前後
の簾をあげ、左右の和尚を冥く、土井次郎実平い
むくらん地のひゝきを小具足申して、源兵三十余騎
引具しく、車のあとをおかんくち護しなるべく
▲実や世中い定めなきを神無月時雨降あく高尼坊々

後撰
○神な月時雨降あくと人ゝ言めなきを時雨てそのの初めとを

○神な月時雨を降なるの意なるの意なるこれ
此二首の歌を考へつけり　高尼坊ハ高尼明寺神社を
河抹系図云抹一天下の神を月を、出雲国より神
を月尺、神月なり。新月の備神系集一に云ふ
其神を上の浦より神く来除の時、かゝの如なる除
舟、波のよる漂ふ不ゝ及ふ数、其法神ハ彼浦の神
在の社ふ集り給ひて、大社へハ参給ひ、此神
在社い不老山と云所に坐す。此神
明神と申し奉る
社説云出雲国秋鹿郡佐陀神社ハ者所祭伊弉尊
也、此所より神在の来ふと云ふ。当社ハ法神の来る

祝されい。百の神く毎年十月此所に会集し給ふ故、
其縁の由よい此月を、神無月と云。かゝる四よい神
在月と称ぜゝ　或云神無月の変、十月い極
陰の月にて、地より上に陽なきゆへ云なり。かゝる無
月ゝゝ。十一月を去も月と云ゆへ、此月下に陽
来復する故よあも月と云ゝ

▲京徳のよ小清りなりく所ハ世く
○京東坂やこのそうハのあるありてとかゝ神をへい
此所を詠くつけうり百万よ清て

▲三河の国やをに　三河ハ社多よ清て、をにハ宗清よ化て
▲是恵第根寺ゑく　是ハ恵、箱根ハ神社也　現女よ清て、

上たよい是ハ柄の清見ゞ横をゝて是ハ柄山より出く富
士のゆのそゝを西ゝ清ゝ人ゞ実へ多ゝ清ゝ是ゝ苔の
海乃ゝ万葉仙

▲西りゝゝゝゝん早月夜清念山ゝ入ゝゝ
早月夜の井ハ相模寺の切通へ上り坂の下よあり。苔ゝ
此井よ色ゝ早の新ゝ名ゝ。此色の女。此井
を汲よ多り。誤て菜力を井の中よ落ゝ名ゝゝ。
水早の新ゝ人ゞゝゝ。
あり。早月山早井寺と号ゝ。　縁起云聖武天皇
天平中よ此井よ光あり。是ゝをゝれべ。井の色不虚
空義の係沢ゝ清ゝ。此中を養ゝ名れい。行基よ

勅し。此侍を化し給ふ事なり。又盛衰記

後堀川百首

○我ひとり思ふ心を知りぬ半月夜ふけ時うつれ　孝陸

▲燒時して秋虞氏が候の函さへ忘れ夜の中。伊

面よ楚歌の音のうち

橘相公賦項羽詩云燈暗數行虞氏淚夜深四面楚歌声　兵

本紀を見るべし。和漢朗詠集よあり。侍のふい

蹊通よ化て　平家物語云藤子の遠同うり風吹入

て燒ふくれい。中ねん洞しく。此侍を二三返朗詠

云ふ〳〵〳〵　臆表記

▲洞をてくく廻〳〵ふも君のふるスの枯てゞふ紅涙千よの袖

廻君とい廻君の曲をいとてけうり。韜よ

涙を。方枝い君の後よりひうけうり。紅涙千よとい紅

君のちうひよ。指る木よ紅涙と云ふを。千よのあ

ふ〳〵うり因村よ涙を

一樹の陰や一河の水皆是紅涙の緣とな

蕭竟濟孝傳曰昔三人各一洲背孤露煢獨三人暗

會於一樹下相問寧為斷金之契二人曰善乃相約

為父子梁朝破三人不離已上見正覺　三畧曰昔者良

將之用兵有鑵草醪者使投諸河与士卒同流而飲

夫一草之醪不能味一河之水而三軍之士思為致

死者以滋味之及已也　兵　明眼論云或處一村宿

一樹下汲一河流一夜同宿　上下畧

雲井の法云　為京良基　一樹の陰乃契りも此世ひ
とつ　新長京与合
○雲ゐ　一樹の陰も契りとゝ法のおしへ　実隆
▲白梅ゝ佛家ゝ法也。真ゝ雲ゐ　新しい　捨ゝ法也
▲ひとゝ琴琴の法合ゝ　むい　新乃用ゝ　法合ゝ琴の事
後後考
○我ゝ法ゝ　ゝ法合の　ゝ
▲雲の松風　ゝ
秋夜の庚申　ゝ　拾遺集雑上　玄賓
ゝ　松風入琴　ゝ
ゝ　琴の　ゝ　雲乃松風　ゝ
雲の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝて　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
▲志のめ　ゝ　ゝ　ゝ
▲かゝて　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
▲平　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

千壽

別所の長者と呼ばるる
○長くより別所つる体ひよりなるべき事さの

雲林院

雲林院い大德寺の東南にうづみと云所四跡と。本尊観音の像い今礎礎成身院ふりり
古今集雅秋云雲林院い世野ふりり。東西
七十三丈南北七十三丈と。本尊の東にうづ
みと云所とて
三代實録云雲林院者故無品常康親王之旧居也
親王出家為沙門貞観十一年二月十六日以此院
付属遍昭曰深草天皇賜此居之天皇登遐常康落
髪昊天罔極德猶難報恩欲永為精舍令学天台教
伏思永賜年分度者三人傳天台之法門試学之道

請以為元慶寺別院成親王之心願矣
花島除情云雲林院ハ今の大徳寺也。昔淳
和天皇の離宮ホ〻〻〻称里内裏ト云多帝
御幸ありし所也。仁明天皇不分し給ふ深
常康親王の御所也。本堂ハ彼親王の室也。
其後此親寺〻〻〻〻。大層の伽藍小実性
僧都を別当小補せ〻〻〻〻

天王寺ゝゝ乾し。伊勢物語に昔男ありけり
ゆゑしりの歌芦屋の里ふるよしもなくて
いなとてとみるゝ。昔乃ゝふ
「芦の屋乃なぐの塩焼てひるまゝつぐのふ藤もさゝぬ
とゝみる。そこの里をゝゝゝる。家をもん
芦屋乃なぐとゝいひける 下畧
剛毅扶云芦屋の里い業平の歌なるを七
ゝゝ冷泉流伊勢物語注云津ゆゝゝの歌い
有業娘。母のゝゝゝゝ凝得ゝる不ゝゝゝ
▲我幼ゝゝし法ゝもゝ伊勢物語を駅
伊勢物語い杜若ふ源氏

私云此源ふ芦屋の里乃ゝ元。伊勢物語を
ゝ則ゝ。或説の夏ふ業平二条の后をとて
ゝゝゝゝゝ。ゝ説ゝ桐院ゝゝゝゝゝ。ゝ説文
連見。業ゝゝゝふ業平二条乃后。凡伊勢物
語一部ふおかく。ゝ桐院ゝゝの縁文ゝ。
ゝい伊勢物語と源氏物語とゝゝゝゝ
ゝ。ゝ不渭い。ゝ桐院ゝ源氏物語の作者
紫式部の墓ゝゝ。伊勢ふ伊勢の河ゝ紫乃
ゝ乃桐を見んとつけゝゝ。ゝ文弘徽殿の
細殿ふ人めをふくゝゝのひとゝゝゝふ伊勢
物語ふ弘ゝ殿の御ゝゝゝゝゝ文。ゝい

源氏花宴巻小源氏の歌。弘徽殿の細
殿よりて朧月夜の内侍よりのひ給ふ事あり。
源の作者を業平二家の所ふれあるよ
きる歌を集の撰ふ玉箒といへる書ある
此源のものうけを異ふうけを此書ある沈
もの一紙此外も尋ねはべりしかなかく
きる歌ふ如ハ

▲花新開日初陽潤鳥老帰時薄暮陰
菅之原春色雨中盡花新開日初陽ハ正月を云。落
也。和漢朗詠集小野篁ハ文書之

▲玉乃歌の月の影ふいとくもり
月乃影ハ月宮殿のみを光。実ハ玉乃歌
の月をつけ給ふ説河。月宮殿ハ楊貴妃ふ
▲芦屋の里を立出て
後拾遺のくし我住方ハ芦屋の里ふ秋風ふ夢
▲汐のひるこの浦を
蛭児の浦ハ摂州武庫郡西の宮乃浦ふ。此所ふ神社ハ。号
廣田明神。蛭子を祭ると。俗ふ浦の名とも。
廣田社ハ祈ふ一座今ハ五座也五座之説異之
神代巻云伊奘諾尊伊奘冊尊生日神次生月神次
生蛭子雖已三歳脚猶不立故載之於天磐樟船而

順風放棄兵　先代旧事神武天皇紀云天皇問曰
汝神者是奇不側神也誰也欲図兵　迺對奏曰吾
實者是去来諸尊去来冊尊其初生児豊蛭児太神
海守畋得幸市守賈得幸田守種得幸軍守戦得事
朝守事得幸天下富持神往住廣田国如若奏飛去
兵　同神社本紀云廣田神社若櫻宮天皇時天照
大神告天皇曰吾荒魂不可皇后同在欲栖御心之
廣田国依之立祠兵　兼邦百首抄云摂州西宮の
與ふとあるいとえびとゝ云者つゝけく
そゝぐとゝ云所反とゝ蛭子のゝこえび
とゝい波つゝあるゝ浦人をゝとゝ

▲松浦小値とゝづく海士ゝ海人を
いひけゝゝ海士ゝ海人ゝ海人ゝ海人ゝ海人ゝ
旧事本紀云履中天皇二年瀬津国波花浦有二神
一神乘青舟二神乘黄舟天皇遣本苑臣問其由神
曰吾舟止処造社祭吾必有国益本苑臣令一海士
以從御舟自海至河此海士至処名云海士崎　文暦
圖書編曰和泉其南海奥泊舟者為阿賣介　撥儿兵
▲紀波津小値やこゝ乃紀ゝゝ　雜波津
▲櫻ふゝゝゝゝあゝゝ乃櫻ふゝゝ
櫻をゝゝゝゝ

白氏文集三十三云尋春題諸家園林遥見人家花便入不
論貴賤与親疎矣 侍のかい弘ふくゝゝ
○ゆゑ根 ○ぬゝてとゝむる人の多せ行ゝむけきい入乃世ゝの名
▲そゝろ中ゝ紅れいハ たゝとしい何紅とゝ
郭景純詩云借問此何誰矣 晋賈充詩云室中是
阿誰矣
▲風のとい名ゝとゝ 風とい地ゝ西行
楊ゝ沼ゝを
○チ ○ゝふゝとい風のとい大井行ゝ吹ゝゝとゝ名ゝゝれ 後恵
▲ゝゝをとゝゝとい当乃羽風ゝ落ゝゝれ乃霧ゝ
人ゝゝとゝゝゝゝゝめゝゝゝの下風ゝ

説文曰欺疑辞也又嘆辞也又詣助也矣
○ハ ○ハゝゝゝゝゝ

業雅抄云人ふかき山ゐなりけるに、
ゐなとゝ無ふれく無あつ〳〵ふせんとて、あつと
いたゝ産し。世俗ふるまはけしと云なり。万葉ふ器
くゝ云つゝゝてゝなれなるまいゝゝ。ふつて。清つと。
れのつゝゝなるゝゝ　古今実枝抄云洞
ゝふゝふ乃樹とゝくゝくゝまゝゝゝ　ふの樹ゝい
ゝ撫ふの樹ゝ。中堂止観院の庭おの樹ゝゝ
素性ハ遍昭の俗ゝゝ　ゝし時のゝし。俗名ゝ利
又ハ俗時ゝゝゝ。大和物語ゝ俗時遍昭乃
俗へゐゝゝまい。法師のゝい法師ゝゝゝゝゝ
ゝて。法師ゝし俗ゝゝゝゝゝゝ　文畧

竟恵古今抄云素性ハ遍昭の二男。俗名ハ義人
義方。世一ゝ出家して。清水法師ゝゝる
一　後長谷ふ住ゝゝ。権律師小僧ゝゝゝ
▲ゝゝ風ハ花のゝゝゝゝゝゝぶゝゝけんつゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝん
古今集春下　素性好風ゝし。洞云云ゝゝゝの
ゝゝいゝゝのゝん小ゝ揚の花乃ちるをゝめる
ゝゝ　業雅抄云風ハ花のあゝゝとのゝゝゝて
ゝけんつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人小和いふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

▲玉の疵乃一村を千金ふりくしくい　因村雨

▲千顆万顆の玉ゝ　菅三品、冷泉院宴花光浮

水上序云堂日堂風高低千顆万顆之玉深枝深浪

表裏一入再入之紅　朗詠集ふあり。顆ハ玉のつぶ

▲乱れいろぬ色ゝもいとゝ　ふゝ花をとゝ衣袍藻

激しく紅底を動かせい　同序云誰謂花不語

輕漾激兮影動底　袍藻ハうゝさ波ゝ。激ゝハ

ふのゝびゝゝをゝゝ

空辞樹　東坡詩云尽日問花々不語

ふゝ根　ふゝふゝ花ハいとゝ新やゝゝのまん

▲抑揚をゝゝゝせゝく　豊久ゝ浪を

▲紅の袴ゝゝゝゝゝ女性東帯ゝゝゝゝゝ

二条の后業平を指ゝく云　東帯ゝゝ袍ゝゝの

裝束表袴を云ゝ。石の帯を引くゝゝゝゝ

を東帯ゝゝゝ。　論語公冶長篇曰束帯立於朝

▲在中将業平　左京を畧ゝく在中ゝゝゝ

或云中将ハ大将かゝの同ふかゝゝゝゝ中

ゝゝゝ。天子神護元年以来此官名ゝ。中

ゝゝ女ゝの負数ゝゝゝ

数ゝゝゝゝゝく皆ゝ中ゝかゝゝゝゝ

▲又孫の妻を結ゝゝ　又孫の妻ハ意の河し

ゝ前千ゝ　ゝゝの孫乃二条ゝゝゝゝ

▲昔男ありけり　伊勢物語の作者乃ち在
初小昔男ありける業平を指く人也。
愚見抄云昔しいせ業平三十年以往のことを
云小也。大うさ乃ふしいた云年も今年乃
むう。時ハいま今日のむう。又今日ハ明日
乃昔しるく。　惟清抄云昔男とつけく
業平の名とせり。右歌の前ものさるを除て
もしかく小昔しいひ切く男とも。時く
男とも云業平のるもとく
宗祇抄云昔と云小業平の名乃体なるとハ
昔と云字小色くの体千万の言ならん。

さまとハ業平の分如此也其心ハ詞ありて詞ハ
ハ紀氏貫ひら古今の序小もみるく

▲ちはやぶる　ちはやぶるハ人の花ハ
色を云。俗小つやとやうとし。栄映光
之字也小ちはやぶるとあり
○こ吉野ハ分乃言葉乃ちはやぶる
▲ふるさとの　ふるさとの月小ハ
○彰千人乃大内乃月ハ本かたてのこ月と乃ふる　乾坤
▲昔なじみの　昔なじみの花衣
妄の字し
○古いさとふ云乃色小ハ色とうん昔なじみの花の色ハ　素性

月やゆくぬ春乃春の春ぬ我身ひとつはもの
身もしらく　伊勢物語及古今集春のむかへ
業平ふし。朝ぼらけ。見ハ二条の后ふ春ぬ
春ぬ後、我ハのやひとふ春ぬ春もうへ
春くえ春ぬ春をよめる。愚見抄云月や
ゆくぬ春ハ月をとうめく。月ハ春の月を
ハ春さう。春ハ春の春ふくハ春さうとう
めく。文ふ春ふ春ぶるハ行ふ春ふる春
ハし春ハ。面ふ春ぬ人乃ハ
うふ春ひ春をしう春　肖関春月やゆくぬ
ふハ。ゆくく春朝ぼ。ふうふ春ぬく

春も春身もりの春ふ春ハ月も
序ふ春ハあうう春ぬ春ぬ。古今
の分成へし。微妙家ハ春ふ此序を春
こ春のやうふ春ぬ春ぬ春せ春ぬ春ぬ
春ハ弘徽殿の細殿ふ人めを涼く思ひハ乃
下簾のつまくく人ハ春ぬ春ぬ春ふ
ハ春ぬ春ぬ春ぬ春ぬ春ぬ
ハ業平二条の后ふ春ぬ春をつけ春ぬ。
但伊勢物語ハ春ぬ春の文文ふ春ぬ。
弘徽殿ハ拾芥抄云七間四面清涼殿北矣

桐壺のもとぐむうひこし　細殿ハ称名院殿江云廊
の字をもあらうゝ　泯江ハ楚云弘徽殿の東ふ
ろうゝ廊あり。そもをもを細殿しゝ云ゝ
おくうれい女御弘ふ沒を
▲ささゝゝゝや　二月し。衣更着云。
下学集云三月也此月餘寒猶厳故衣更着也共
▲扨日の市乃内ふ名て所云るゆい我大内ふ行り
業平東ふ下ると云ゆい指の俤し。業平ハ名
ふゝゝるゆ。東ふ藝居せしをあゞ
ゝゝ行り。之河ゆ八橋ハ紀有常ゞ娘二条の
后ゝゝゝゝゝゝ人を八橋しいひ。

実ハ吾妻ふ下ゝ行ゝゝ。難義抄都本不下本。
冷泉流注等ふ見ゝゝ。此ゝ注ゆの名所大
内ふ行りゝつけゝゝいゝ知ゝゝ。又杜若
ふを注ゝ。扨いゝゝ知ゝ歌ふ沒を。日乃おい紀簒ふ
▲彼遍照ゝつゝ称ゝ紀乃歌つゝ行くゝ川を
打渡り　遍照ゞ云ふ。紀の歌つゝ芥川と云い
ゝ。古今集物名ふゝゝ名ふゝゝゝゝゝゝ遍照ゝ
「数めもハ沒ハ芥ふゝゝゝゝゝゝ

九川と云川とわかれいさゝきを以て
そもゝ業平二条の后をぬすみ出したてまつる
累ねて　今業平ふつけなり。遍昭が物名
の歌に、此物語に二川を云今くゝ侍るめり
芥川は内裏小塵芥を流す川と。是を御溝
と云。　藻塩草云、梅の花の匂ふ春
流れとゝ。
吟泉流抄、注云、此川と云は清水也。
とゝ云ふ心也。内裏ふかき所の
下ゝ流れ出る故歟。是は常寧殿の
塵の入る所をとりくゝ云。是は堀川
を流れとゝ云。
藻塩草云中殿のおとゝ　和歌抄云大
川を芥川と云。大とゝ川の異名とゝ

遍昭は号花山僧正又号良僧正俗名良峯宗貞桓
武三世孫大納言安世子也仁明帝寵臣蔵人右
近衛権少将聖朝晏駕後嘉祥三年三月廿八日出
家秋衡二年五月十二日慈覚受円頓戒又安恵和
尚受三部大法貞観十一年叙法眼元慶元年十二
月九日授僧正寛平二年正月十九日寂年七十六
已上真言傳文畧　今昔物語云宗貞八源草夫也乃
寵ひとゝ。大臣前ひとゝ世中のうく

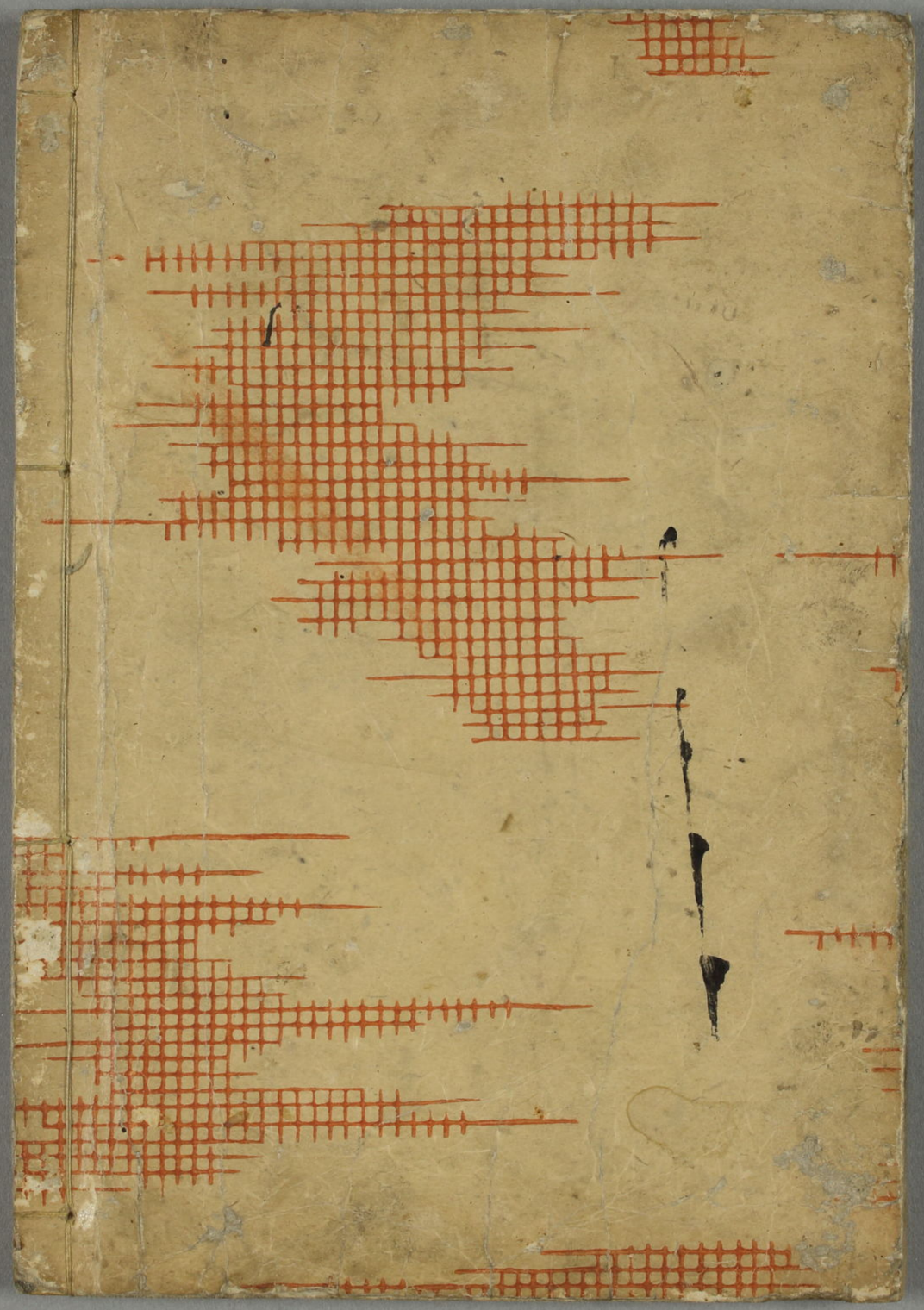
とい。且、文徳帝をたてまつりて出家。名
をこれに通服。七十二ゝ寂をとる。

▲うげろう衣い紅葉重　錺抄云十月十一月晴
着之青紅葉、黄紅葉、紅々葉色々。仁安三年十月九
一日大嘗會御禊故殿黄紅葉下襲同半臂着之保
延五年十月廿六日成勝寺供養宇治左府着紅葉
下重　矣
長秋記
○こ物や宮ゝ色々の紅葉重の袖の見てる

▲狩衣　ゝ　ゝ　ゝ

本草ニ一名ヒトツミと　藤袴蘭と云和名
ふらんとあり　ふらんとは　古名のふらふ
はなあり　葉に麻ふ似く支故あり　野ふ多て
秋紫白花を咲く　花真葉と　葉ふ匂ひを
侍紅楚河なしふ添せて　蘭と　世ふ賞
もる葉ととりのいと　大ふの変門のごとく
花ふ香ひり　真蘭ふ非ず　遯齊閑覧曰今人
所種如変門冬者名幽蘭非真蘭兵
古人もはやまりて　今の世俗ふ蘭と云ものを
真蘭と云　本草綱目ふ洋ふ云ふ
紫乃一本也ふ武花の色ハ紫色ふ

▲侍従袴やその赤き乃ふ賊色の
侍従ふ云ふ赤ふ浅き　その赤い基俊口傳抄云
美濃信濃丹ふの塩ふ　ありとぞ
園太暦云木賊色狩衣事貴命云木賊有三色黄青
黒等也皆以老色也此内黒木賊至極老色也不用
吉事也黄木賊ハ色様々青木賊短澤共表也兵
○赤織刈その赤ふの赤乃乃ふ　ふ秋の夜の月
▲持衣の袴を冠乃巾ふ　ふ
持衣の袴ふ冠を　ふ　ふ
鄙り事の付ふ　ふ　ふ
供奉の人ふ　ふ　ふ

のゆかしきうらやましかりしかの御をうらやましかりし
ゆかしきの巾みハ髻(モトリ)をつくるなり。冠の巾みハ髻をつくるさまを云。
弁色立成云巾子幞頭具所以掛髻者也矣
指衣ハ松風ゆかしきを。冠ハ杜若ゆかしきを
▲たそかれ月もそらやのくれ　たそかれ月ハ三日四日
の月をいふ。又夕暮をたそかれ時といふ。
暁をうらやましき時とうらやましかりし。かの暮さ時ハ人
人もえ見ぬうらやみ。うらいたきをいふなり
たそかれ時といふ。うらやましき時。うらいたき
さま時といふなり

▲袖ハ袖ハうらやましかりし洞うら
○古　○袖ハ乃袖ハ洞うら橋乃数を知ぬ人ハ袖
ゆかしかりしの袖　小忌衣を云。宴家ゆかしを
流れ乃花
○重高　○たそかれ人ハ洞ゆかしかりし乃花乃形ハ
花の葉ふ乃数うせ流ハ乃ハ乃形ハ
同乃ゆかしを